
真剣で私に恋しなさい！！～白髪の放浪者～

薫、

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！～白髪の放浪者～

【Nコード】

N51790

【作者名】

薫、

【あらすじ】

川神に訪れた白髪に金色の眼を持つ少年、神楽春樹。時に傍若無人な振る舞いをみせる少年と風間ファミリーとの物語。他の作家さん達を見て勢いで始めました。矛盾や誤字脱字があると思いますがあたたかい目で見てやってください。ご感想、ご指摘、ご要望お待ちしております。12/7現在、加筆及び改正しました。

プロローグ（前書き）

初の投稿になります。

ブローグ

「うう……」

呻き声を上げ地面に舐めるようにして倒れているのは、この辺りを縄張りにしていた不良だった。少なくとも6人は倒れている。

倒れている不良達の傍には身体の線が細い少年が立っている。見た目は倒れている不良に比べると若く、女性のような顔立ちをしている。

その顔は怒りで満ち、ひときわ目立つ彼の白髪は返り血で所々が赤く染まっていた。

「ひっ……!!」

小さく悲鳴を上げたのは、倒れる不良達の仲間の思われる男だった。

「…まだいたのか」

口角をつり上げ目の前にいる獲物（男）を見据えるその瞳は月明かりに照らされ金色に光っている。

男は蛇に睨まれたカエルのように足が竦みその場から動けず、自分の身に迫りくる暴力をただただ無抵抗のまま受けるしかなかった。

.....。

.....。

.....。

「そこのお前」

最後の不良を倒し、裏路地から出て行くとする白髪の少年に話しかける人物がいた。

「なんだ女。お前もそこに倒れていくズ達の仲間か？それなら……」

「そんな奴らは知らん。お前強そうだ…私と戦え！！！」

突然現れた少女はそう言うや否や、拳を少年に叩きつけた。

「ツツツ……！！」

少女の拳を辛うじて避けた少年は先程までの笑顔とは違う意味の笑みを浮かべていた。

「いいだろう俺を楽しませてくれよ」

「さあ！私を満足させてくれ！！」

2009年―桜が咲き始めたばかりの川神市―

少年を変える出会いだった。

プロローグ（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

出会い

『川神院』総代である川神鉄心は悩んでいた。

悩みの種とは孫娘の川神百代についてだ。

「いつそ山籠りでも…じゃが、あやつは拒むじやろうな」

——強者故の孤独。力を持て余しておる…。力を追い求めることじたいは決して悪くない。

長時間悩んでいた為一度思考を止め、一息つくこうとしたその刹那――。

「むッ!？」

もう一人の孫娘である一子と共に走りに出たはずの百代の気が爆発的に上がるのを感じた。

——また誰かと試合でもしておるのか。じゃが……。

百代とは別の人物の気も同時に感じ取る事ができた。それはどこか懐かしく感じる気で鉄心は百代よりこの気の持ち主の方が気にかかった。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

構えをとった両者は砂を舞い上げながら弾丸の如く飛び出し互いの拳を突き合わせた。

衝突した拳はそのまま止まったが、均衡した状態は長く続かず百代の力が少年の力を上回る。

自分よりも体の小さな少女に力負けした少年は後方に勢いよく飛ばされる。

飛ばされているにも関わらず少年は笑っていた。そのままクルッと回り何事もなかったかのように地面に着地する。

着地した少年を追撃するように百代は間合いを詰め、次々に攻撃を繰り返していく。

攻撃の手を一切緩めない百代の姿は、まるで嵐。1つ1つが必殺の威力を秘めている。一回でも直撃すればただでは済まない。

「面白い！まだ力を残してるな」

そんな状態が5分も続き、ついに百代の攻撃の1つが少年を掠める。

「くっ」

掠めたことでできた一瞬の隙を百代は見逃さなかった。

「はぁっ！ー！」

百代の一撃が少年に襲いかかる。

「ちい……」

少年はガードしようとしたが間に合わず拳が直撃し吹っ飛んだ。地面を5mほど転がりぴたりと止まる。

百代はこれで勝負がついたと思い、川神院に電話するために自分の携帯を取り出した。

「今のは中々に効いたぞ」

力がある程度セーブしているとはいえ直撃すれば立つことすらできないはずが、何事もなかったかのように立ち上がる少年に対し百代は驚きを隠せなかった。

「……お前名前は？」

「春樹」

百代に対峙する白髪の少年は自分の名を短く告げた。

「春樹：お前になら私も本気を出せそうだ」

元栓を開放したかのように辺り一帯には百代の気で満たされていた。草は揺れ、虫の鳴き声が止む。

「川神流―無双―そこまで!!」!？」

勝負に夢中になっていた百代は近くまで接近され、なお且つ声を上げられるまで鉄心の存在に気付くことはなかった。

「なんだじじい、邪魔するなよ」

不満を言いながらも百代は目の前に立つ白髪の少年―春樹を見つめていた。

「百代…お前さんは一子と一緒に走りにでていたはずなんじゃがのう」

鉄心は睨むように百代を見た。

「さあ走りに行くかなあ」

百代は逃げ出すようにこの場を後にした。それはもう疾風の如く。

「やれやれじゃ…で、お前さんは？」

「……………」

春樹は鉄心の問いには答えずただ黙っている。せつかくの楽しみ（戦い）を奪いとつた鉄心の問いには答える必要がないと思ったからだった。

「ふむ…では質問を変えよう。神楽家縁の者かのう？」

「ッ！？なぜその名を……」

沈黙を守っていた春樹の顔には驚きと怒り、二つの表情が見てとれた。

「やはりのう。お前さんの気が古い知り合いのモノに似ておったのじゃよ」

「おい…それ以上は言わない方が身のためだぞ？」

自分の姓である“神楽”を春樹は嫌っていた。

「なかなか心地よい殺気を飛ばしよる」

春樹の殺気を真正面から受けた鉄心は、まるで赤子の相手をするかのように笑顔でそう言った。

「じじい…何者だ？」

「川神鉄心。さっきの百代の祖父じゃ。そろそろお前さんの名前を教えてもらってもよいかのう？」

「春樹……神楽春樹だ」

変わる日常

「俺は何でここに連れて来られたんだ」

白髪の少年『神楽 春樹』は川神鉄心に連れられ川神院の中にいた。これでもかといわんばかりの不機嫌オーラを振りまいている。

「春樹君、お前さんの強さを見込んで頼みがある……」

「なんだじじい」

「川神院の門下生になつてはくれぬか？定期的に百代と戦ってほしいのじゃが」

鉄心は最近の悩みの種であつた《百代の対戦相手》をようやく見つけたのだ。

強者故の孤独…そこから助け出してくれる可能性のある者を……。

「断わる。俺の楽しみを奪つた奴の頼みを聞く道理がどこにある？」

強者との戦闘を楽しみにしている春樹からすれば鉄心は邪魔をした張本人。

「それは残念じゃのう」

春樹の返事を聞いた鉄心は「——どうしたもんか……」と思考の海に耽っていた。

「……………」

春樹と鉄心の間に訪れる沈黙。

その沈黙を破ったのは不機嫌な春樹だった。

「あの女との戦闘は面白い。門下生はお断りだが、戦闘だけなら俺の意思でやろう」

口では偉そうに言っている春樹だったが、やはり百代との戦闘には興味があったようだ。

今は不機嫌オーラをしまっていてその表情は戦いが楽しみとばかりに嬉々としていた。

「ほんとか？それはありがたい。お前さん住まいは決まっておるのかのう？」

川神院に来るまでに春樹は“最近川神市に来た事”を鉄心に話していた。

「ない」

「ならばこの川神院は無理じゃが、代わりになる場所を提供しよう。寮を経営している知り合いに頼むとするかの」

「じゃが、1つ条件がある」

「条件だと？」

眉をピクリと動かした春樹は再び不機嫌オーラを展開し鉄心を睨んでいた。

「川神学園…。その生徒になつてほしい。わしは川神学園の理事長でもある。お前さんにはぴったりの場所だと思うのじゃが」

春樹は数秒考えると軽く頷いた。

「学校か…どうせやることもない。暇つぶしになるだろ」

「決まりじゃな。日取りは後日また伝達するから、今日はここに泊まっていきなさい」

春樹を泊まる部屋へと案内すると鉄心は自分の部屋へと向かつて行った。

はじめは部屋で大人しくしていた春樹だったが百代との戦闘を思い熱くなってしまった為、頭を冷やしに外へと出た。

「おい春樹」

春樹を呼ぶ声がした。

「なんだ女。さっきから見ていたな」

「バレてたか…というか女って呼ぶな。私には百代という名前がある。親しみをこめてモモちゃんとも呼んでくれ」

「誰が呼ぶか。お前など女で十分だ」

春樹はそう言うと言い悪い笑みを浮かべながら百代へ向けて殺気を飛ばす。

「その殺気は気持ちいいが今は納めてくれ…我慢できなくなる。さっきの事でじじいから説教を受けたんだ。春樹、お前との戦いはまたにする」

百代に戦う気がないとわかると、春樹は殺気を納める。

「……………」

春樹は興ざめし他に話すこともないので、足早にこの場から去るうとしていた。

「待てよ…。少しくらい話したっていいだろう？こんな美少女と話せる機会なんて滅多にないんだぞ？」

先程までの真面目な雰囲気はどこかに消え、春樹をからかうように話しかける。

「俺には話すことなんてない」

「いいじゃんかよ」

「二度も言わせるな、俺にはお前と話すことなんてないし、話すつもりもない」

「いいじゃんかよ」

「おい人の話を「いいじゃんかよ」……いいだろう」

百代の強引な説得（？）に負けた春樹は近くにあったベンチに座り込む。

「わかればいいんだ。お姉さんは嬉しいぞ」

春樹の返事に満足したのか、百代はニコニコしながら春樹の隣に座った。

不機嫌な様子の春樹と笑顔の百代の間には大きな温度差があった。

「春樹は何か武術をやっているのか？」

「……していない」

「どこから来たんだ？お前みたいに強い奴を知らないはずがないん

だ」

百代の言うことは確かだった。武術の総本山とまで言われている川神院には、ほつといても強い者の情報が入ってくるはずなのだ。だが白髪の少年の少年はおるか噂すら聞いたことがない。

「どうでもいいだろ」

春樹はそう言つと立ち上がり自分の泊まる部屋に向かって歩き出した。

見る者を見透かすような金色の瞳はどこか遠くを見ているようだった。

「春樹っ！また存分に死合おう！！」

この場から去る春樹の背に向けて百代が叫んだ。

春樹は振り向かずに「ああ」と一言だけ呟くと、そのまま歩き去っていった。

春樹が去ったあとには、先程の美少女はいなかった。ただ静かに燃え上がる炎のようにいるのは戦いに飢え魅入られた一人の武士^{もののふ}だった。

「楽しみにしているぞ」

百代の言葉はまだ肌寒い夜のなか風に掻き消された。

朝の出来事

ぽかぽか陽気の川崎市、百代は鼻歌を奏でながらご機嫌の様子で歩いていた。その歩く姿はどこかスキップをしているようにも見える。

「姉さん最近、上機嫌だね」

百代の舎弟（弟分）である直江大和が百代を見ながら言う。

「弟よ、なぜなら私を満たしてくれる可能性のある男が現われたんだ」

「モモ先輩を満たす男だと？ 俺様よりナイスガイなのか？」

ジム通いで鍛え上げられた自慢の筋肉が無駄に目立つガクトが聞く。

「…ガクトより下を探すほうが難しいよ……」

ピタッとくっつくように大和の隣を歩く椎名京がガクトの言葉にボソッと呟いた。

「酷いよ京。ほんとのことでも言ったらダメだよ」

週刊少年ジャソプを読みながら大和達と歩く地味な少年、師岡卓也。通称モロが軽く注意した。

「そつだぞ京。ガクトも一生懸命生きているのだ」

金髪の外国人、クリスティアーネ・フリードリヒも注意する。

「お前らも十分ひでえよ…」

仲良し軍団からの集中砲火を受けたガクトが涙目になりながらツッコんだ。

「おーい！置いていくなよーっ！」

大和達の後ろから声を上げながら走ってくるのは、昨日の夜からどこかに出かけていた頭に巻いたバンダナがよく似合う少年、風間翔一だった。通称キャップ、大和達を纏めるリーダー。

「おはようキャップ」

大和が遅れてきたキャップに挨拶をし、そのあとに皆も続く。

「ああおはよー。…で、なんの話しをしてたんだ？」

「ガクトより下の男を見つけるのが難しいって話題で盛り上がったんだよ」

「ちげーよ！モモ先輩を満たす可能性のある男が見つかったって話だろっ！！」

モロの言葉にガクトがツッコむ。

「なんだそれ！面白そうな話じゃねーか」

「キャップじゃないけど、姉さんの口から男の人の話が出てくるなんて珍しいから気になるな」

「俺様ですら振り向いてもらったことがないのに」

「それはもういいよ！..」

「.....しょーもない」

それぞれなんやかんや言いながら気になるようだ。普段から大勢の女の子に囲まれていて男を寄せ付けない百代の口から男の話が出てきたのだから。

大和達の質問に百代が答えようと口を開いた瞬間――

「お前が川神百代だな？ お前を倒して全国最強のチームになるやる」

「俺たちにやられて地面に這いつくばれYO！」

「フヒ...フヒヒヒヒ.....」

百代の前に突然現れたのは、上から青・黄・赤に髪を染めた頭の悪そうな不良たちだった。

「またか...」

不良達に囲まれる百代は平然としていた。

これはいつものことで、どこからか川神百代の話や噂を聞いた不良や武道家が全国からこうして集まってくるのだ。

「いつもなら骨の一本でも外すところなんだが、今の私は機嫌がいい。面白いことを言ったヤツは見逃してやろう」

「バカにしてんのかぁ!!」

「なめるなYO」

「フヒ…フヒヒヒヒ」

百代の言葉に逆上した不良たちが一斉にとびかかる。

「はぁ…せっかく見逃してやろうと思ったのに」

百代はそう言つと超加速で不良達に詰め寄り骨を外そうと――

「うぐっ」

「へぶっ」

「ハヒッ」

としたのだが百代が触れる前に不良達は倒れていく。

倒れた不良達の前に立っているのは百代ではなく、白髪の少年だった。

「おいなんだコイツらは？」

――10分前。

「あーダルい……」

綺麗な白髪をなびかせ、金色の瞳を眠たそうに細めながら河川敷を歩くのは神楽春樹。

朝早くに起きる習慣がついておらず朝に弱い春樹だったが、川神鉄心の申し出を受け今日から川神学園に通うことになっている。

一度はこのままどこかに行こうかと考え足が止まった春樹だったが、やはり学園に行こうと再び歩きだしていた。

一度決めたことには従うのは春樹の信条であり、約束を違えるのは気に入らない。

百代の死合いのこともあるが、普通の学生生活を過ごした事のない春樹にとって今回の鉄心による申し出はありがたく、実のところ川神学園に通うことも楽しみの一つだった。

「でもやっぱり眠いな……ん？」

眠気眼に映ったのは、頭を色鮮やかに染めた不良たちが百代と対峙している姿だった。

何か話しているようだがココからは聞こえず、気になった春樹は飛ぶようにして百代がいる場所へと向かった。

近づくにつれて聞こえたのは不良たちの声だった。

「バカにしてんのかぁ!!」

「なめるなYO」

「フヒ…フヒヒヒヒ」

百代がいつものように不良たちを私刑にしようと思っていた大和たちは、予想外の乱入者に驚いていた。

驚くのも当然で突然現れた白髪の少年が百代に襲いかかった不良たちを目にも止まらぬ速さで倒してしまったのだから。

「誰だあれ？」

誰もが突然の出来事に驚き呆けているなかキャップがはじめに口を動かした。「見たことない人だけどうちの制服着てるね」

「モモ先輩と同じくれー速いんじゃないか？」

キャップの言葉に続くようにモロとガクトが口を開いた。

「……コイツらはなんだ？」

倒れている不良たちを見下ろしながら尋ねるのは春樹。

「いつものことだ。気にするな」

「そうか…百代（死合いのこと）楽しみにしている」

百代の言葉を聞いた春樹はこの場を離れていった。

「姉さんあの子はいつたい？ 知り合いみたいだったけど……」

恐らく誰もが思っていることを大和が尋ねた。

「アイツだよ。さっき話してた男ってのは…ははは、楽しみだなあ」

百代はスキップをしながら笑い声を残し学園へと向かっていった。
残された大和たちはというと――

目を輝かせている者・びっくりして口を開けている者・何かを考

えている……それぞれ違う表情をしていた。

「あわわっ…私ずっといたのに全く話してないですう」

「まゆっちこれは作者が忘れていたみたいだぞ」

「次からは頑張ります!!!」

一人泣いている者がいたのは秘密だ。

転入とクラスメイト

「そろそろかのう」

川神鉄心は学長室で今日から川神学園の生徒になる神楽春樹を待っていた。

「おいじじい来てやつたぞ」

ノックもせず乱暴にドアを開け入ってきたのは春樹だった。学長室の中を我がものが顔で歩く姿を見ると礼儀など無用ということがよくわかる。

「よく来たのう。あらためて名乗ろうわしが川神学園学長の川神鉄心じゃ」

鉄心は春樹の無礼極まりない姿を気にする様子もなく、「ほっほっほ」と笑いながら春樹を向かい入れた。

「俺はどこにいけばいい？」

そんな鉄心の自己紹介を無視したのは自分のことにしか興味のない春樹。表面上はふてぶてしい態度をとってはいるが、内心学園生活が楽しみで仕方ない。

「つれないのう…、まあよい。お前さんには2年F組で過ごしてもらおう。百代の1つ下の学年じゃ」

鉄心の言葉を聞いた春樹は少し眉を動かし鉄心を睨みつけた。

「なぜ百代と同じ学年じゃないんだ？」

「そう睨むな理由はある。お前さんと百代が同じ学年にいと、いつ戦闘をしかすかわからぬ。戦闘じたいは許すが場所と時間をわきまえてもらわなければならぬ…一般生徒を巻き込まないための配慮じゃよ」

「……まあいい」

しぶしぶ納得した様子の春樹。

その後、鉄心は簡単に川神学園のシステムについて春樹に説明をした。

決闘システムのこと・体育祭のこと・修学旅行のこと――。

最後に鉄心は春樹の肩をポンと叩くところ言った。

「川神学園を楽しんでいきなさい」

鉄心は見抜いていた。春樹が学園生活を楽しみにしていたことを……。

だが春樹は鉄心の言葉を「ふん」の一言であしらった。人の好意を素直に受け入れない男だった。

「では教室に向かってくれるかのう…小島先生」

規則正しいテンポで学長室のドアを4度ノックをし入ってきたのは、ムチを持った女性だった。

「小島先生、こやつが今日からF組に転入する神楽春樹じゃ。先日続きスマンが頼むわい」

「いえ、おまかせください。2 - F担任の小島梅子だ」

「……神楽春樹」

「うむ、今日からよろしく頼む。では行くでしょう」

学長室から出ていく春樹を見ながら鉄心は微笑んでいた。

自分の孫娘である百代に……いや学園の生徒たちにどんな影響をあたえてくれるか――

「ほっほっほ、楽しみじゃのう」

――2 - F教室。

春樹が配属される二年F組の教室内は騒々しく、問題児だらけのクラスだった。

「みなさん！小島先生が来ますよー！」

小さな体を精一杯な場しながら注意を促すのは、このクラスの委員長こと甘粕真与。

真与の言葉を発端に騒がしかった教室内は静まりかえり生徒全員がピシッと背筋を正した。

「朝のHRをはじめる」

「起立！ 礼！」

生徒全員が元気よく挨拶をする。

「おはよう！着席して良し！出欠を確認する。甘粕真与——」

出欠の確認も終わり小島先生は続いて口を開いた。

「よし全員来ているな。さて突然だが転入生が来ている」

ざわっ……！！

「静粛につ……！！」

ざわついた生徒たちを見て小島先生はムチを床に叩きつけた。

すると騒がしくなった教室ないが再び静まりかえった。

「では、入ってきなさい」

ガラツとドアを開けて入ってきたのは、春樹。

転入生を見て生徒達は大きく二つのリアクションをとった。

男子は落胆し、女子は喜んでいる様子だった。

その中風間ファミリーは――。

「あれって…まさか」

「朝見たヤツだよな？」

「間違いないよ」

「おおー。アイツじゃん」

「今朝の少年だな」

「……………」

「ん？ん？ん？」

上から大和、ガクト、モロ、キャップ、クリス、京、ワン子。みんなが同じようなリアクションをとっているが、ワン子一人だけ頭に「？」マークを浮かべている。

「なんだ直江達の知り合いか？ まあいい自己紹介を」

小島先生に促され春樹は教室内を見渡し口を開いた。

「神楽春樹だ」

春樹は自分の名前だけを言うとそれ以上何も言わなかった。

「質問のある者は挙手するように」

生徒たちが手を挙げだす。

「春樹くんは彼女居たりするのかな？」

「いない」

今時の女子高生の容姿をした生徒、小笠原千花の質問に春樹は短く答えた。

「姉さん…いやモモ先輩のこと知ってたみたいけど」

ワン子を除くファミリー全員の疑問を代表して大和が質問をした。

「ああ。百代には俺の相手（死合い）をしてもらう約束があるからな」

「じゃあ今朝の件については？」

「百代は俺の獲物だ。手を出すやつは許さん」

大和の（百代に関する）質問には次々と答えていく春樹だった。

「お姉さま？ 今朝のこと？ なんだかよくわかんないけど…先生
っ！提案があります！神楽君を“歓迎”したいと思います！」

大和と春樹の話を聞き終わったワン子が口を開いた。

「またか川神、まあよかろう。神楽、決闘システムについては聞いているな？ 川神がお前と戦いたいそうだ」

「待て犬ッ！今朝の動きを見て自分も戦いたいと思ってたんだ。
だから自分に譲れ」

「ふんっ！アタシが先に言ったんだから、クリは引っ込んでなさい
よ！」

どちらが戦うか言い争いを始めたワン子とクリスの両者を見て春
樹は口角を上げ笑みを浮かべた。

「そんなに戦いたいのなら二人とも相手をしよう。…決闘内容は二
人同時か？ それとも一騎打ちのどちらでもいいぞ」

「一騎打ち！！」

春樹の言葉を聞いた二人は同じことを同時に叫んだ。

「待て、肉体を使用する決闘は職員会での了承が必要だ」

「ほっほっほ、話は聞かせてもらったぞい」

「学長いつの間に……」

「いいよわし（学長）の特権で了承しよう。少々特殊じゃが、続けるの決闘ではちとキツイかの」

突然どこから現われた鉄心が春樹に聞く。

「じじい誰に言っている？連戦だろうと女に負ける俺ではない。あまり
見くびるなよ」

「だそうじゃが、はてどちらが先じゃ？」

「先鋒お任せあれー！！」

鉄心の問いに先に答えたのはワン子だった。

「おい犬！抜け駆けは軍法違反だぞ！！」

「では先に戦うのは一子じゃな。それでおいかの春樹？」

「ああ」

短く答えた春樹は口角をつりあげ悪い笑みを浮かべた。

ワン子を見る金色の瞳は獲物を品定めするかのような鋭いものだった。

転入とクラスメイト（後書き）

いざ決闘

ざわざわ…ざわざわ……。

2 - Fの教室内は騒然としていた。

肉体を使った決闘事態は珍しくないことだったが、今回の決闘内容はワン子とクリスを相手にした連戦だった。

ワン子もクリスも女の子なのだがとにかく強く、武道をかじったことのある者や腕におぼえのある者でも勝てるかわからない。

それを知ってか知らずかはわからないが、春樹は二人を相手にすると宣言した。

「武器は教室にあるものを使い」

「アタシは当然、薙刀っ！」

ワン子は自分の得意な獲物である薙刀を手にする。

「薙刀か…俺も同じ得物を使おう」

ワン子を見て自分も同じ得物使うと言い春樹も薙刀を手を取った。

本来は何も得物を持たず己の身体1つで戦う春樹だが、相手（ワン子）を格下と判断したようだ。

「おいおい、そりゃあ無茶だろう」

春樹の言動を見てガクトが驚き半分、仲間を侮辱されて怒り半分といった様子で言った。

「ワン子はこの前に負けてしまったけど、それでもやっぱり強いんだよね？」

不安そうに聞くのはモロ。

「ああそれは自分が証明しよう、たしかに犬は強いぞ。次やれば勝敗は半々だ」

モロの問いに答えたのはワン子と先日戦ったクリスだった。

「神楽君、ほんとにそれでいいのかな？」

「俺に二言はない」

校内アナウンスで決闘のことが放送されたことで、グラウンドに

はギャラリーが大勢集まっていた。

先日のワン子とクリスの決闘を見ていた生徒達は二人の実力を知っていて、今回の決闘がその二人を転入生が相手をするということで大いに盛り上がり、学年・クラス問わずお祭り状態になっていた。

大和達もグラウンドに出てきており、ギャラリーの中心にいる春樹とワン子の姿を見つめていた。

「弟よ、これはどういうことか説明しろ」

「姉さん今朝のあの子がワン子とクリスと決闘するって言ってるんだよ」

後ろから現われた百代の問いに大和が答えた。

「ほほう…それはおもしろいことになっているな」

「しっかり聞けてなかったけど、姉さんとあの子ってどんな関係なの？」

「春樹とは最近出会った。私の対戦者が務まる可能性のある男だ」

「えっ！？…姉さんの相手が務まるって…どんな化け物だよー！」

「弟よ、こんな美少女に化け物なんてひどいじゃないか」

百代は大和の首に腕を回し絞めつけた。

大和が驚くのも仕方のないことだった。

大和にじゃれつくようにしている川神百代は武道四天王の一人。その相手が務まるということは白髪の少年、神楽春樹もその領域にいることになる。

大和には春樹がそんな領域にいるとは思えなかった。

今朝の光景を見れば強いのはわかるが、目の前にいる白髪の少年からは姉さんと呼び慕う百代と同じくらい強い雰囲気伝わってこない。

「信じれないか？」

「姉さんの言うことだから、信じるけど」

百代は絞めつけるのを止め、大和を開放した。

「でもアイツはなんで薙刀なんて持っているんだ？」

百代が見る春樹は確かに薙刀を持っている。

「なんか同じものを使ってやるとか言ってたけど」

「モロロじゃないか…そんなことを言っていたのかアイツは」

「姉さんの知っているあの子は違うものでも使ってるの？」

「いやアイツはそもそも武具なんて使わず素手で戦う」

先程までの大和と百代の会話を聞いていたモロは顔をほころばせ

た。

「だったら普段と違って使い慣れていないものならワン子にもチャンスはあるんだね」

「それはどうか……」

百代はそう言うとグラウンドの中心にいる春樹へと視線を向けた。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！二人とも前へ出て名乗りをあげるが良い！」

「2年F組 川神一子！」

「神楽春樹」

名乗りをあげた両者に鉄心はルールと注意事項を伝える。

「勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず攻撃を行なおうとしたらワシが介入させてもらう、良いな？」

「承知したわ！」

闘志を燃やすワン子と

「
ああ
」

ただ静かな春樹の

「いざ尋常にはじめいつ！！！！」
」

決闘の火ぶたは切られた！！

白髪の戯れ (前篇) (前書き)

白髪の戯れ（前篇）

大勢のギャラリーが見つめるなか、先に動いたのはワン子だった。手に持つ攻撃範囲が広い薙刀を器用に扱い春樹に攻撃を浴びせていた。

上段に構えた薙刀を春樹の足元を狙い振り下される。

振り下された薙刀は標的に当たることなく大きな音をさせながら地面に突き刺さった。

「その程度か！」

「まだまだー！！」

避けられるのも計算に内だったのか、薙刀の刃を返すとそのまま打ち上げた。

「その程度」

が、それすらも容易く避けられてしまう。

「それぞれそれー！！」

避けられた後も突き、薙ぎ払い、フェイントを織り交ぜ全身を狙った連続技。暴風雨を巻き起こす嵐の如く春樹へと斬撃を浴びせて

いくも、その全てを避けられてる。

「もっと速く！もっと鋭く！！もっと強く！！！」

それでもワン子は手を休めずまだ攻撃を繰り返していく。

春樹に攻撃をさせないつもりだろう。実際、決闘が開始されてから春樹は攻撃を一度もしていない。

それだけ攻撃を繰り返して尚、未だに一度もクリーンヒットはあろうか掠りさえしていない。

流れを掴みきれていないワン子は後方へと跳び距離をとり呼吸を整える。

「川神の攻撃はえー！ほとんど見えねー！」

「でもあの白髪の男の方も凄いぞ！一度も当たってねーぞ！」

二人の戦いを見守っているギャラリーがドツと沸く。

「スゲーなアイツ！ワン子のあれを全部避けてるぜ！」

キャップは春樹の動きを素直に褒めていた。

「……でも全く攻撃してこない」

京はあくまで冷静に見ていた。

「避けるので精一杯なのじゃねーの？」

ガクトはワン子よりの考えを言った。

「あれは見ているだけだ」

ガクトの言葉を裏切るようにクリスが口を開いた。

「それってこのままだと前回の二の舞になるってこと？」

モロが不安そうに聞く。

「ああ」

「でも少しは成長してるだろう？」

——薙刀の軌道を目で追いながら避けていた。目を慣らすために見
に回っているのだと思ったが、受けもせず難なく避けていた。最
初から目を慣らす必要なんてなかったはずだ。ワン子のペースに合
わせているのか？それにあいつ……

「あの人笑ってましたよね」

「まゆまゆか、あれをどう思う」

「たぶんですけど一子さんの攻撃パターンを見ていたんではないかと」

「そんなことする必要があるとは思えん」

「わたしも不思議なんです。でもあのひ……」

まゆつちが何かを言おうとした瞬間、春樹が呼吸を整えているワ
ン子へと接近し距離が縮まった。

「今度は俺からいくぞ」

春樹はそう言つと手に持つ薙刀を頭上に持ち上げ振り下ろした。

その後も突き、薙ぎ払いといった薙刀を上手く扱った様々な斬撃
がワン子を襲っていく。

先程までは攻勢的だったワン子だったが、今は防戦一方でガード
をするだけで精一杯のようだ。

「あれって……」

「先程までの一子さんの攻撃と全く同じ組み合わせですね」

「それも攻撃スピードまで一緒だ」

——アイツ遊んでいるな。

普段の百代なら春樹の行動に怒るはずだった。武人なら相手に全力で当たるのが礼儀というものだからだ。だが今は怒りではなく、春樹の技量に感心していた。

「くっ……！」

「どうした。もう終わりか？」

春樹はワン子を挑発するように笑みを浮かべた。その表情は自分をもっと楽しませてくれと言っているようだった。

「まだよっ……！」

その言葉はワン子の闘志を燃え上がらせた。自分に襲いかかってくる斬撃を打ち返した。

「これでもくらいなさい！！川神流——」

薙刀が打ち上げられ腕全体が頭上に持ち上がりガラ空きになった春樹の胴目掛け、ワン子は砂を巻き上げながら中段に構えた短く持った薙刀を左から一文字に薙いだ。

春樹はバックステップをしワン子の薙刀を避けた。

それだけで終わらずワン子は春樹のもと居た場所を通り過ぎた薙刀の柄を手の中で滑らせながら長く持つと一回した。遠心力で早くなり威力が上がった薙刀をそのままもう一度春樹目掛け薙いだ。

「砂丘双斬————ツツツツ————!!」

ガキッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「どうなっただんだ!？」

「音しか聞こえなかったが、攻撃は当たったみたいだ!」

砂煙で中の様子がわからないギャラリーの声が響く。

「おもしろい技を使うな」

ワン子の攻撃は春樹の身体には届いていなかった……。

砂煙が消え中から姿が見えた春樹はワン子の薙刀の刃を、手に持つ薙刀を縦に持ち防いでいた。

「これでもダメなの……？」

自身を持って繰り出した技をいとも簡単に防がれワン子は悔しがっていた。

「そう気にするな！」

春樹は笑っていた。

先程までの相手を品定めするような見下した笑みではなく心底楽しそうに……。

「それでは次で終わりにしよう」

春樹は宣言すると薙刀を構えた。

その構えは先程のワン子の繰り出した時と同じ構えだった。

「まさかっ!？」

春樹の薙刀が砂を巻き上げながらワン子に迫っていく。ただワン子の時とは1つ違ったのは左右逆ということ。

迫る薙刀をワン子は春樹と同じようにバックステップで避けると、すぐにまた前進し春樹へと肉薄した。

「技を使っただったら、その対処法も知ってるわ!!」

「違うぞワン子」

誰にも聞こえない声で百代が呟いた。

「フンツツツ!!!」

右方向からの薙刀が描く軌跡は、春樹が声を上げると共に左からの薙ぎ払いにシフトされる。

春樹が同じ技を使うと思っていたワン子は裏を搔かれてしまったが、辛うじて自分の持つ薙刀でガードすることができた。

しかし威力を逃がしきれず薙刀は外側へと弾かれてしまう。そんなワン子の身に一回転した薙刀が威力と速度を上げて迫る。

無理な体勢からガードしてしまったワン子は硬直状態になっていて避けること叶わず、脇腹に直撃してしまった。

「ぐうつつ……!!」

小さく声を上げたワン子はその場に崩れ落ちた。

「それまで！勝者！神楽春樹！！！」

決闘を締めくくる鉄心の声がグラウンドに響く。

わあ——！！！！！！！！！！

鉄心の声をかわきりにギャラリから大きな歓声が沸き上がった。

「……また負けちゃった……」

歓声の鳴り止まない中、呟くワンスの姿があった。

「俺は認める。お前の強さを」

短い台詞だったが、嘘は感じられず春樹の本心からの言葉だった。

「神楽くん……」

自分を認めてくれた春樹の言葉が、今のワン子にはとても嬉しかった。

「俺のことは名前で呼べ。『神楽』という苗字が嫌いなんだ」

春樹はそう言つと背を向け、その場から離れた。

「わかったわ。アタシのことワン子でいいから！」

返事はなかったが、ワン子はそれでよかった。

「おいワン子！大丈夫かー？」

春樹と入れ替わるように、キャップを戦闘とした風間ファミリーがワン子のもとへと駆け寄って行く。

「負けちゃったけど、もう悔しくないわ！！」

「そんなこと聞いちゃいねーよ！くらった場所大丈夫なのか？」

「骨は・・・大丈夫。しばらく痕は残るがな」

―あの攻撃をくらってこの程度…手加減でもしたのか？

「とりあえず休んだら？」

「ほらこっち」

わき腹を抑えるワン子に手を差し伸べるモロと京。

「強かったあ…多分お姉さまと同じくらい？」

「それほどまでに強かったのですか？」
―それにしてはこの怪我の具合は……。

「次こそは勝つッッッ！！！」

ワン子に武道四天王の一人“川神百代”という目標に加え、神楽春樹という新たな目標ができた瞬間だった。

「おいお前たち！自分のこと忘れていないか？」

忘れられていた……。

風間ファミリー含めたギャラリーは今の決闘内容で頭がいっぱいになっており、教室に帰ろうとまでしていた者もいた。

「みんな酷いじゃないかー」

「悪かった。俺様完全に忘れてたぜ」

不満を言うクリスにガクトは謝った………ポージング付きで。

「ぐえっ！！」

声を上げたのはガクト。クリスに蹴りあげられた時に漏れた声だった。

宙をまっガクトに面白がった百代と京の二人が追い打ちをかけていく。

「ひでー」

そう言いながらガクトはどこかへと飛ばされていった。

「まあいい……」

一度深呼吸したクリスは氣を持ち直しグラウンドの中心に……

白髪の少年の立つ場所へと向かって歩いていった。

「ガンバレー!!」

後ろからは風間ファミリー全員からの声援が送られていた。

白髪の戯れ (前篇) (後書き)

ワンスの技はオリジナル

白髪の戯れ (後篇) (前書き)

いやー、まとめきれませんでした。。。

読みにくい事この上ない内容になっております

心してお読みください

でわでわ

白髪の戯れ（後篇）

先程までワン子が戦っていた場所に今度はクリスが立っていた。

白髪の少年と金髪の少女が向かい合う。

「自分はレイピアを使う！神楽殿はまた相手と同じ武器を使うのか？」

「ああ、そちらの方が楽しめるだろう？」

「そうか・・・その余裕すぐになくしてやる！！」

自分を甘く見ている春樹の態度にクリスは腹が立った。そう叫ぶとキツと春樹を睨みつけるクリス。

「フハハハハ！楽しみにしているぞ女」

「では、次の決闘に移るとするか。これより本日二度目の川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！二人とも前へ出て名乗りをあげるが良い！」

「2年F組 クリスティアーネ・フリードリヒ！」

「神楽春樹」

お互いに名乗りをあげる。

気合十分といった雰囲気です。春樹を睨むのクリスに対し、静かに相

手をその金色の眼で見据える春樹。

「いざ尋常にはじめいっ！――！」

鉄心の開始の合図と同時に春樹目掛け突進し仕掛けていくクリス。

「どう見る姉さん？」

「そうだな、クリスは先日のワン子との戦いを見るかぎり強い」

「それならっ！」

「まあ待て、話はまだ終わっていない。強いと言ってもそれはあくまで冷静だったならでの話だ。今のクリスは前回とはまるで違う。相手に自分と同じ武器を使われる、それも得意とする武器ではなく自分に合わせるためだけにだ。クリスはそれだけでも気に入らないだろうが、春樹のあの相手をなめているような態度がさらにクリスを冷静な状態から遠ざけているのだろっ。」

そう言われてみれば今グラウンドの中心で春樹と対峙しているクリスからは、先日の戦いとは違うのが素人目に見てもわかる。

鋭さがなくなり繊細さを欠いていて、テレフォンパンチのような攻撃になってしまっている。

そんな攻撃相手に届くわけがない。それをわかっている春樹は目の前にいる金髪の少女を憐れむような目で見ていた。

「もういい失せろ」

春樹は声を低くくし呟くようにそう言った。

直後クリスよりも速く鋭い刺突を放った。

冷静な状態であつたクリスなら避けられずとも、ガードは出来ていただろう。

だが今の状態のクリスでは不可能、怒りに身を任せているせいで相手をしっかりと見れていないのだ。

春樹の放った刺突は標的の肩部分に当たりクリスを吹っ飛ばした。

「くっ！！ぐはぁ！！」

春樹は吹っ飛んだクリスを上から見下すように見る。

戦闘前とは違い落胆したような様子の春樹。

せつかく楽しめると思っていた相手が全力を出していないからだ。

そんな相手と戦う訳もなく勝負に興味をなくし、武器を置きその場を去ろうとする。

「待てっ！まだだ！まだ終わっていないぞ！！」

「なんだ屑。俺はもう興味が無くなった。お前のような屑とは戦わん」

「たしかに屑と言われても仕方ないだろう、怒りに身を任せてしまっていた。それは詫びよう、すまなかつた！！今一度、自分にチャ

ンスがほしい」

クリスはそう言つと頭を下げた。

「その状態で全力でこれるのか？」

「ああ、当たつたのは左肩だけだ。肩腕さえ使えればいつでもいける！」

「そうか。まだ今度こそ俺を楽しませて見せろよ」

「約束しよう」

そう言つと春樹とクリスの両者は再び武器を持ち向き合った。

——戦う時は心は熱く、頭は冷静であるべき。

それを思い出したクリスは先程までとは違う。

相手をしっかりと見据え自分の出来る限りの力を示そうとしている。

先に仕掛けたのはクリスだった。鋭く速い刺突を春樹に向けて放つ。

「ほう、これなら楽しめそうだ。俺をもっと楽しませろ女！！！」

春樹はそう言いつつクリスの放つ刺突をさけた。

「望むところだ！はあっ！！！」

続けざまに突きのラッシュで春樹に肉薄するクリス。

序盤は余裕をもって避けていた春樹だったが少しずつだが余裕がなくなっていく、徐々に避けきれずレイピアを使い受け流す場面が目立つようになる。

「クリスの奴やるじゃねーかー!!」

「僕でも、さっきまでとは違っつてわかるよ」

「冷静になった分本来の実力を出しているんだろう」

岳人が褒めそれにモロと大和が続く。

「でも・・・未だにクリスの攻撃が当たってないのはたしか・・・」

「ワタシの時もそうだったけど、攻撃が全然届かなかったのよ」

「まだ春樹のやつ力を残しているな」

「あの方は凄いですね。あの鋭い突きを1つ、1つ見極めています。」

クリスを褒める大和達とは違い、武士娘である百代達は春樹を評価している。

「クリスもスゲーけど、あの新入りもスゲー！」

キャップはあくまでこの試合を楽しんでいた。

クリスのラッシュも永遠に続くわけではない。

終わらない攻撃など存在しない。

「くそっ！一度距離をとって「そうはさせん」くっ！！」

クリスは手を止め距離を取ろうとしたが春樹はそれをさせないつもりがないらしい。

一瞬で間合いを詰めるとクリス同様突きのラッシュを放っていく。

先程まで自由に攻めていたクリスと攻められていた春樹の立場は逆転した。

守りに徹するクリス。

「速いが犬の時と同じ！自分の放った突きを真似ているだけ。それなら！！」

ワン子の時と同様に自分の攻撃を模倣しているとわかっているクリスは攻撃が終わるのを待った。

「そこっ！！」

春樹の突きのラッシュが終わると同時に、クリスは全力を込めた突きを放つ。

「貴様のその余裕が自分に好機をもたらした！！」

ツーンと流れ出る血。

だが出ているのは春樹の血ではなかった。

今倒れているのは攻撃を出したクリスだった。

見ていた観客の誰もがクリスの勝利を確信していた。

「なんでだよ！！今の見えたか京？」

「私の眼でも・・・わからなかった・・・」

岳人の問いに答える京。弓道部に所属している彼女でも春樹の動きは捉えきれなかったらしい。

「百代先輩は見えましたか？」

「ああ見えたには見えたが・・・まゆまゆは？」

「私も見えましたが、どうしたらああなるのかわかりません」

クリスの突きは確実に春樹を捉えていた。

本来ならそこで春樹は吹っ飛ばされているはずだったのだが、何故かレイピアが春樹をすり抜けその直後クリスは倒れていた。

一部始終見えていた百代とまゆっちは不思議で仕方なかった。

——なぜ自分は倒れている？

それはクリスも同じだった。

確実に捉えたと思い勝利を確信した。

その直後に感じたのは勝利の宣言ではなく、自分を襲った衝撃だった。

観客も誰もがこの状況がわからず黙りこんでいた。そんな静寂の中、最初に口を開いたのは春樹だった。

「俺に本気を出させるとは」

よろよろと立ちあがるクリス。

——！？ほうまだ立てるか……。

春樹は一瞬驚いたが、すぐに元の表情に戻る。

「たいした女だな。クリスティアーネ、俺は嬉しいぞ」

「自分も嬉しい。やはり日本に来てよかった。こんなに強い者に出会えた」

クリスはそう言うと同時にその場に倒れた。

「それまで！勝者！神楽春樹！！！（予想以上にやるのう）」

わあああああつっ！！！！

鉄心の合図と共にあがる歓声。

「クリス大丈夫かっ！？」

クリスに駆け寄っていく風間ファミリー。

「見た目ほど酷くはない。大丈夫だ」

「それはよかった」

「それにしてもタフだね」

「飛ばされたわりに感じた衝撃はそれほど強くなかった」

「「!?!」」

百代とまゆっちは何かに気付いたようだ。

「まゆまゆわかったぞ。さっきから思っていた謎の正体が」

「私事です」「オレもわかったぜ」

「お姉さまどういうこと?」

「それはだな……………」

クリスとの勝負を終えた春樹は鉄心と話していた。

「満足かじじい?」

「はてなんのことかのう?」

とぼける鉄心。

「まあいい。じじい早く百代と戦わせろよ」

「約束は守る。じゃが今は」

そう言つと鉄心は春樹の後ろを見て指をさした。春樹が振り返ると

「やるなー神楽!」

「すごいじゃん春樹君!」

と言つて話しかけてくる2・Fのメンバー達だった。

「なっ!?!これは・・・」

「ほっほっほ、春樹お前さんを歓迎するそうじゃ」

春樹の周りにはいつまでも人だかりができていた。

白髪の戯れ (後篇) (後書き)

はい作者です

もう何も言いますまい

誤字脱字の報告

ご感想、ご指摘、ご要望お待ちしております

友人との出会い（前書き）

お久しぶりです。

PCの調子が悪く更新できませんでした

短いですがどうぞ

あとあとがきにてお知らせがあります。

友人との出会い

決闘を終えた春樹の周りにはF組の生徒たちが集まっている。

ワン子やクリスの強さを知っているF組の生徒は、その二人に勝った春樹を歓迎するかの様に賛辞や拍手を送っていた。

「2・F組を代表して言わせてもらいます。ようこそ川神学園へ！神楽ちゃんこれからよろしくお願いします」

「あ、ああ・・・よろしく」

今まで学校や友人といったものと縁のなかった春樹は、F組の対応に嬉しさと照れで俯いてしまった。

「おい！春樹なに似合わない態度とってんだよ！！」

いきなり後ろからやって来た百代に突き飛ばされる春樹。

「百代・・・今俺は機嫌がいい。今回は許すが次はないぞ」

「はっはっは！私はいつでも準備はできている。なんなら今ここでしてもいいんだぞ？」

そう言つと百代は手加減しているいえ常人なら見えない早さで拳を飛ばした。

「っ！？」

百代の放った拳を春樹は受け止めた。

「望むところだ。ここでお前を叩き潰してやる！」

春樹は戦闘態勢に入り百代に殺気を飛ばす。

「その強烈なまでの殺気が私を満たしてくれそうな気にさせる。さあ早く来い！！」

二人の武の天才が向かい合う。

「アホかモモ！！あれほど言ったじゃろう！戦闘する時はワシの許可のもとでしろと！！」

いつの間にか後ろに居た鉄心が百代の頭をはたいた。

「昨日といい、今日といいどれだけ邪魔するんだよ」

「何度も言ってるが別に止めようとは思わんよ。戦闘する場所が問題なんじゃ」

「ちっ、わかったよ。じゃあ近いうちに頼むぞ」

「もちろんじゃ約束しよう」

百代は鉄心に約束をとりつけた。

「と言うことだ春樹。またの機会にするよ」

「勝手な奴め。まあいい楽しみは後にとっておくとしよう」

「私も楽しみにしている」

そう言いあうと互いに自分の教室に戻って行った。

教室に戻る最中でも春樹の周りには人が集まっておりいろんな質問をされていた。

ただ春樹を見る視線の中には今までに味わったことのない殺気などが混じっていたことは気のせいと思いたい。

—— 2 - F 教室。

「どうしたの大和、そんな顔して」

「いやヨンパチのやつに写真頼んでおいたんだけど写ってなかったんだ・・・」

モロが聞いた事に答える大和。

「一応聞くけどそれはワン子やクリスの写真？」

「違う。それで写ってなくて悔しがるのは岳人とヨンパチくらいだよ！俺が頼んだのは神楽の戦闘中の写真の方だよ」

「そつかあ。でもなんで？」

「ワン子の決闘見ただろ？」

「あのワン子の真似すごかったよね。なんかこう全部模倣してた感じ」

「あの後ヨンパチに神楽の動きを撮ってもらったように頼んだんだが・・・これ見てくれよ」

「ん？これは・・・」

手渡された何枚もの写真を見る。

「これって？大和こんな趣味が・・・」

「……！？違う！違うぞ！！これは岳人が頼んでた写真のほうだった。本物はこっち」

あわてて写真を取り替える大和。

「これって・・・何も写ってないけど？」

「クリスマス戦の最後に見せたあの動き、あれの時の写真なんだ」

「あああれは何が起きたのかわからなくてビックリしたよ」

二人でそう話していると

「大和にモロ！あいつもなんだか面白そうだよな仲間に入りたいん

だが・・・」

「クリスやまゆっちと同じ条件なら反対はしないよ」

「わかった。大和もそれでいいな？」

大和が頷くと「なら俺は行ってくる」と言い、春樹のもとに走って行った。

「なあ神楽ちよつといいか？」

「ん、なんだお前は？」

「俺は風間翔一。風間ファミリーのリーダーだ！」

「そのリーダーが何の用だ？」

「お前を風間ファミリーに歓迎したいと思う！今日放課後用事でもあるか？」

キャップはいつもの調子で春樹に話かけて、ファミリーに歓迎すると言いだした。

「今日は島津寮と言う所に行かなければならない」

「俺と一緒に寮だ。案内するぜ」

「そうか。なら頼むとしよう」

「任せとけ。あとから他のメンバーも紹介するから。これからよろしくな!!」

「では、また明日」

全ての授業を終えた生徒たちが部活に向かったり、帰宅したりしはじめる。

「神楽案内するから行くぞ」春樹に話しかけるキャップ。

——帰宅途中。

「風間と言ったな。ところで風間ファミリーとはなんだ？」

春樹はふと思った事を尋ねた。

キャップはファミリーが誕生するまでの話、風間ファミリーメン

バーの名前、最近クリスやまゆっちが入ったことなどを教えた。

「そんなわけで今風間ファミリーには今9人が居るんだ。神楽が入ってくれたら10人になるけどな」

「俺はお前たちの仲間を倒した男だぞ」

「俺も見てたけど、あれは真剣な決闘だった。それをどうこう言うつもりはない」

春樹は内心不安だったがキャップの言葉で安心した。

「それにお前が入ってくれると面白いと思うんだ！俺の勘はよくあたるんだ」

キャップは春樹の気持ちを知ってか知らずかそこまで言った。おそらく後者だろう。

「フハハハハ！ではこれからよろしくしてやろう」

本当は「よろしくこれからは仲良くしてくれ」と言いたかった春樹だが彼の性格上そうは言えなかった。

思っている事とは逆のが勝手に出てしまう。

「ははは、やっぱりお前は面白いやつだ。よろしくな！！あと俺のことはキャップと呼んでくれ！」

キャップは春樹の偉そうな態度を気にせず、手をのばし握手を求めた。

春樹はそんなキャップに好感をもった。

「島津寮には風間ファミリーの他にもう一人源忠勝と言う人が居るんだけど、顔は怖いけどいい人だ。俺たちはゲンさんと呼んでいる」

そんな話をしているうちに島津寮に着いた。

「おかえり。あんたが鉄心さんの言ってた神楽春樹君だね？」

「あなたは？」

「私は島津麗子、この寮の管理人兼寮母だよ」

「島津・・・ああ岳人とやらの母親か。これから世話になる。よろしく頼む」

「この寮にはいくつかルールがある。まあその辺は交流がてら他の寮生聞くといいさね」

麗子さんはそう言つと春樹を部屋に案内した。

案内した後は「綺麗に使っておくれよ。ああ早く家に戻ってドラマの続きを見ないと」と言いつつ家に帰って行った。

春樹は部屋に入ると今日あった事を思い返していた。

主に風間ファミリーについての事だったが……

——あんなに話しかけてくれたのは初めてだな。俺に仲間ができ

るとは……そう言えば風間が言っていた由紀江と言っていた女どこか懐かしい気がするのだが？まあいい今はどうでもいいことだ。

春樹は思考を一時止め、「寝るか」と言い眠りに着いた。

友人との出会い（後書き）

以前、活動報告に書かせてもらった
サザンクロス様主催のコラボ企画がついに始まりました。
ぜひお楽しみください！！

誤字脱字の報告

感想、ご指摘、ご要望お待ちしております

食事の時間（前書き）

先日の雨で濡れ、風邪をひきました

短いです。

食事の時間

「おい春樹！起きろ！」

「……んー、なんだ風間か。何の用だ？」

「飯の時間だ。ほかのやつらもそろってる」

「そうか。では行こう」

キャップに起こされた春樹は眠気眼を擦りながら向かった。

「俺は大和。神楽君今日から同じ寮のメンバーとしてよろしく」

「……ほら京も！」……椎名……よろしく……」

「春樹自分もこの寮でお世話になっている。よろしく頼む」

「あの黛由紀「自己紹介なんてあとにしてとりあえず食べようぜー！俺腹減って死にそうなんだ」ううー」

「まゆっち主役はあとから名乗るんだぞ。気にすんな」

「ありがとうございます松風」

そんな感じで夕食が始まった。

「そう言えば神楽君にクリはコテンパンにやられていたな」

「やられたのは認めるが言い方が悪いぞ直江大和！」

「はっはっは、俺は春樹のおかげで儲かったぜ」

「・・・そういえばキャップは金もつけに走ってたね」

「何？もしかやキャップは自分達が負ける方に賭けていたのか？」

「ほとんどヤツがクリスとワン子が勝つ方に賭けていたから、逆に張った！」

「キャップさんらしいですね」

騒がしい食事の風景だった。それでも春樹には騒がしいのが心地よかった。今まで一人で食事を取っていたからだ。

「どうした春樹？具合でも悪いのか？」

クリスが心配して声をかける。

「何でもない気にするな・・・」

春樹はそれ以降何も話さず黙々と食べた。

食事が終わり寮の皆が居間でゲンさんがくれたケーキを食べていた。

賑やかな空気の中には春樹の姿もあつた。甘い物が苦手な春樹だがせつかく楽しそうに皆がしているので我慢して食べることにした。

「おいおい春樹ボーイ何、辛気臭い顔してるんだよー？」

いきなり松風が春樹に話かけた。

「こら松風失礼なことを「おい女」ひゃーすみませんすみません」

凄い勢いで土下座までするまゆっち。

「まゆっちを怒らないでくれー」

「顔をあげる。その人形はなんだ？」

「へ？」「オラはつくも神の松風ヨロシクなー」

「・・・駄馬・・・」

「誰だオイラのこと駄馬と言ったのはー！？」

「フハハハハ！面白い！俺は春樹よろしくしてやろう駄馬よ」

「まゆっち以外でオイラを個人として見てくれたのは春樹が初めてだよ。感動した！ってオイラは駄馬じゃなーい！」

「個人で・・・松風は馬でしょ」

冷静な大和が突っ込む。

キャップはクリスとケーキ早食い競争をしていた。

京は春樹に興味がなく大和にもたれかかり小説を読んでいた。

「女お前の姓は黛だな？」

「はい。そうですがそれがどうかしましたか？」

「いやなんでもない。忘れてくれ・・・」

春樹はそう言つと部屋に戻って行つた。

食事の時間（後書き）

熱（言い訳）で何も浮かばなかった。

誤字脱字の報告

ご感想、ご指摘、ご要望お待ちしております

休日と風間ファミリー（前書き）

もつむぢぢゃくぢぢゃ・・・

休日と風間ファミリー

「うーす春樹居るかあ？」

陽気な感じで俺に話しかけてくるヤツと言えば。

「なんだ風間？」

「いいかげんキャップって言えよな。まあいいや、今日暇か？」

「・・・ああ今日は特に用事はない」

「それなら今日連れていきたい場所があるんだ!!」

「わかった」

「なら準備して河原に来てくれ!!」

俺にそうつげた風間は駆けて行く。

「暇つぶしにはなるか・・・」

顔を洗い、準備をした俺は河原に向かった。

「ハアハア・・・なんで俺がこんな事を・・・」

予想外だった。こんな目にあうとは、今俺は野球をしている。
しているのだが・・・

「おい春樹。行つたぞーっ」

「なぜこちらにばかりくるんだ？はあはあ・・・」

そう何故か俺のいる所にしかボールは飛んでこず、ひたすら走り回っている。

「もう無理だ・・・」ボタン。

悔しいが体力の限界が来たようだ。

おい！今「こいつ体力ねーな」と思ったやつ出てこい！
さっきなど百代が飛ばした打球を追いかけて隣街まで行つたんだぞ

？ビルの上から全力で跳ばなければどこまで飛んでいたのかもわからん・・・まったく無茶なやつだ。

「情けないぞ春樹！自分はまだこんなにピンピンしているぞ？」

くそっ！ボールが飛んでいかず動いていない貴様に言われる筋合いはない！

「うるさい・・・俺に負けた分際で偉そうな口をきくな」

どうだ皮肉たつぷりに言っただろ。

「あれは・・・そう、たまたまだ！今やれば勝てる！」

そりゃそうだ。俺は体力の限界で貴様は能天気につっ立っていただけだろう。勝てるものも勝てん。

「俺様みたいに鍛えてないからそうなるんだ」

筋肉しか能のないバカめ！名前はそう

「おい島津。あまり俺を怒らせるなよ・・・」

「なんだやろうつてのか？」

お前如きすぐに捻り殺して（実際はボコボコ程度）やる。

「ガクト止めときなつて。ガクトじゃ勝てないって」

よくわかっていないか少年A。いや違ったな。

「しょうねん・・・師川はよくわかってるな」

「いま少年って言おうとしたでしょ？それと僕は師岡だよ！」

よく口の回るやつだ。

「神楽君大丈夫？」

手を伸ばし心配してくるコイツは。

「直江、手はいい。さっきから見られている」

「・・・じー。」

なんだ？俺が何をしたというのだ？

「椎名とか言ったな。なぜ「・・・京」ではみ、京は何故見ている」

「大和を観察してた。・・・下から舐めまわすように・・・」

変態と言っやつだな。近づかないようにしよう。

「とりあえずこの辺で休むか！」

風間、助かった・・・今回は恩にきる。

「そんじゃあ昼飯にして後で再開な」

な・・・なに？またあの拷問が行われると言うのか？

「「「「「「はい！」「」「」「」「」「……うむ。」

みな笑顔（百代は俺の表情を楽しんでいるようだ）を見ていると、俺も返事するしかないだろう。儼なぞ感動して涙流している始末だ。それを裏切れるほど俺は悪人ではない。まあ屑にはそれ相應の事はするがな。

さて昼飯はバラバラに取るようだ。どこに行こうか……

「あ、あの……！！！！！！」

「なにか用か儼。俺は腹が減っている手短に話せ」

「よろしければこれを！」

目の前に出されるのは四角い包み（かなり大きめ）。

「これはなんだ？」

「お弁当作ったのですが少しばかり量多くなってしましまして、よろしければご一緒にどうですか？」

ふむ。なにやら旨そうな香りはしている。

「いいだろう。俺と一緒に食べてやる」

「は、はい……！！！！！！」

弁当１つでうるさいやつだ。

「ではどうぞ」

開かれた四角い包みの中から出てきたのは五段重ねにされた重箱。少しばかりではないじゃないか。さてはコイツ

「皆で遊ぶのが嬉しく作り過ぎたが皆にそれを伝えきれず一人でいる俺に話しかけたというところか」

「どきーん！！！」

「おい駄馬どこから出てきた！？」

今あいつは寮に居るだろうが。

「オイラほどになれば念を飛ばせるんだぜ」

「そうか、まあいい。早く箸を渡せ。食べれんではないか」

「はい！どうぞ」

見た目は良し。味は・・・

「美味い・・・美味いではないか。フハハハハ！！どれだけでも食べれるぞ！誇っていいぞ黛」

正直ここまでとは思わなかった。

「お口にあつてよかったです。では私も」

このあと二人で弁当は食べきった。

「美味かった。感謝するぞ」

「いえまたいつでも言うてくだされば喜んで作らせていただきます」

「ああまた頼むとしよう。ホア」

腹が満たされて眠くなったな。

「寝るわ」

寝る間に「やはりあの・・・」と聞こえた気がしたが気のせいだろう。

起きたあと再び野球が開始され春樹が力尽きていた事は言うまでもない。

「百代め！何も富士のてっぺんまで飛ばさなくてもよからう・・・」

休日と風間ファミリー（後書き）

誤字脱字の報告よろしくお願いします。

感想などばっちりー！

風間ファミリー加入（前書き）

駄文以外の言葉が思い浮かばない…

風間ファミリー加入

神楽春樹は危機的な状況に立たされていた。

「金がない……」

そうお金がないのだ。

今までは全国各地を回っていて比較的時間に余裕があり日雇いのバイトなどをしてお金を稼いでいたのだが、今回のように1つの場所に止まることがなかった。

それもあり最近はバイトなどしていないのだ。

「バイトでもするか。風間に聞けば何かあるだろう」

「バイトかぁ…ん！そう言えば1つあるぞ」

春樹はバイトの事をキャップに相談した。

「ほんとうか？」

「あるにはあるがいいのか？けっこう大変だぜ？」

「ふん！誰にももの言っている？どんなものでも大丈夫だ」

春樹は腕を組み自信満々な様子だ。

「じゃあ、向こうには俺から連絡しておく。返事が来たら伝えるわ」

「わかった。その…あ、ありがとうな」

「いいってことよ。また飯にでも連れて行ってくれ！」

キャップはそう言いながら春樹の背中を叩いた。

「今日も連れていきたい所があるんだけど暇か？」

「今日も暇な春樹だったけど返事に困った。先日の野球の事が頭をよぎったのだ。」

「…また野球か？」

「野球もいいけど今日は風間ファミリーの秘密の場所だ！」

春樹が案内された場所とはある廃ビルだった。

「ここは？」

春樹はキャップに聞いた。

「まあまあとりあえず上に行くぞ」

「腕を引っ張るな。自分で行ける！」

ガチャン。

「うーす。春樹を連れてきたぞー」

部屋の中にはキャンプと春樹を除いたファミリーの全員が居た。

春樹は部屋の中を見渡した。

「良い場所だな…みんながココを大切にしているのが窺える」

思ったことをそのまま口にする春樹。

「はい…これ」

「ん？なんだこれは？」

京から手渡されたのは真っ赤な液体だった。

「それは京特性ドリンクだよ。神楽君を歓迎するって。でも…」

モロが答える。

「ではいただくとしよう」「あっ…」「ぐわあっ」

喉を押さえ床を転げ回る春樹。

ファミリー全員が笑いだす。

「やっぱりそうなると思った」

皆が笑う中大和がそう言う。

「げぼっげぼっ…おいこうなることがわかっていたなら、げぼっ…先に言わんか」

いまだに喉を押さえているが、なんとか喉のダメージから回復した春樹。

「ははは。言われる前に飲んだお前が悪い」

「百代…お前は言おうとすらしなかったではないか」

百代に食ってかかる春樹。

「まあこれでも飲んで落ちつけ」

「すまん…ぶうーっ…な、なんだこれは？」

「俺様特性ドリンク、肉汁とプロテインのミックスだ」

「あほか貴様は！なんてものを飲ませるんだ！この駄筋が」

「駄筋だと？ってなんだそれ？」

ガクトは言われたことの意味がわからず頭を傾げる。

「無駄な筋肉の略じゃないかな？」

バカなガクトのために言っただけの京。

「無駄な筋肉だと？俺様の肉体美をバカにする気か」

「ふん！無駄なものに無駄と言って何が悪い？」

ガクトの言葉に挑発するように答える春樹。

その言葉が引き金になり取っ組み合いがはじまった。

「ほら二人ともやめなにか」

クリスが咎めようとする。

「いいぞ！やれやれー！！」

キャップは笑いながら二人を応援している。

「二人はほつといてゲームでもしよう」

「うん。何するー？」

モロの言葉に答えるワン子。

まゆっちはおろおろしていた。

「まゆまゆは私と遊ぼうじゃないか」

まゆっちに邪悪な笑顔でせまる百代。

「大和は私と遊ぼう？」

「ズボンのチャックを下す意味がわからん」

京と大和はいつも通りの会話をしていた。

「まったく皆は薄情だな、ここは自分が」

「クリスあれでいいんだよ。春樹の実力なら取っ組み合いが始まった瞬間にガクトをボコ

ボコに出来たはずなのにしていない。遊んでいるんだよ」

キャップはクリスにそう言うとも口達の方に行った。

「自分もまだまだな。犬！私も混ぜてくれ！」

「筋肉がないくせにやるじゃねーか！」

「ふん！貴様もただの筋肉バカではないようだな」

「やっとわかったか。俺様の筋肉の良さが」

「訂正しよう」

筋肉を基準に話しているバカ二人が居た。

取っ組み合いも終わり、皆がテーブルの周りに集まっていた。

「神楽もファミリーの一員になった事だし改めて自己紹介でもするか」

キャップが言った。

「まず私だな。川神百代3年、武器は拳1つ。好きな言葉は誠！」

「川神一子2年、武器は薙刀、勇気の勇の字が好き」

「2年クリスだ。武器はレイピア。義を重んじる」

「椎名2年弓道を少々。好きな言葉は仁…女は愛」

「1年黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます」

女性メンバーの紹介が終わった。

「で、あっちのバン「待ったー！」なんだキャップ？」

百代が男性メンバーを紹介しようとしたところでキャップが止めに入った。

「モモ先輩この前は適当に言われたから俺たちも考えたんだ。」

「風間翔一2年、好きな言葉は『風』、皆の頼れるリーダーだ!」

「島津岳人2年、好きな言葉は『力』、筋肉で困った事があれば俺様に言えばいい」

「師岡卓也2年、好きな言葉はそうだね『和』かな。機械系の事なら僕だね」

「直江大和2年、好きな言葉は知力の『知』、対人関係なら任せてくれ」

春樹を除くファミリー全員の自己紹介が終わった。

「つぎは春樹の番だぞ?」

キャップに促される春樹。

「あ、ああ…神楽春樹2年、好きな言葉は『鏡』だ。俺の事は春樹で構わない。苗字はあまり好かんだ」

「そついえば春樹君はゴールデンウィーク予定ある?」

モロが聞く。

「特にないが」

「それなら一緒に旅行いこうよ。いいよねキャップ?」

「当たり前だろ！春樹も風間ファミリーの一員だ！！」

キャップもモロの意見に賛成する。

「よくわからんが参加させてもらおう」

「じゃあ決定だな！！このあと春樹の歓迎会をする！全員参加だ！」

キャップの号令に皆が返事をする。

風間ファミリー加入（後書き）

次回からは旅行編になります。

話は変わりますがキヨン様主催のコラボ企画に春樹が参加させていただくことになりました。
お楽しみください！

箱根旅行初日 前篇（前書き）

旅行先からの更新です

久々でございます

短いですがどうぞ

箱根旅行初日 前篇

風間ファミリーの誰もが楽しみにする旅行。それは春樹も同じだった。

「おお来た来た。こつちだ！春樹ー！！」

大きな声で春樹を呼ぶキャップがいた。

「待たせたな」

少し時間に遅れてやってきた春樹は素直に謝った。その顔は旅行が楽しみで寝れなく隈ができた子供。ではなく顔に大きな絆創膏がいくつか貼ってあった。

「どうしたの？その絆創膏」

「いや…昨日ちよつとな…」

モロの質問にバツが悪そうな顔をしながら言い淀んだ。

「んー…痛いかな？」

クリスはそう聞きながら、春樹の顔を軽く突く。

「ぐッ…！！…いや大丈夫だ」

「「ぐッ…！！」」っとか言ってたでしょ。それに心なしか涙目な気が」

「気のせいだ」

あくまで冷静でいようとする。

「とりあえずホームに行こうぜ！電車来ちまうよ！」

やりとりを見ていたキャップが早く行こうと急かすように言った。

それを聞いた風間ファミリーのメンバーはそろそろとホームの方に雑談をしながら向かった。

.....。
.....。
.....。
.....。
.....。
.....。
.....。

「というわけで箱根に到着だ」

「春樹君誰に言ってるの？」

ワン子が首を傾げながら聞く。その頭には「？」が飛び交っていた。

「気にするな」

「んー、わかった。：アタシは走って旅館までいきまーす」

昼までに今日のノルマをこなしていたワン子だったが、まだ鍛錬に勤しむらしい。

「山道、車で30分。結構距離あるよー」

「旅館まで先に着けるか勝負よクリ！春樹君！」

「面白い。受けてたとう」

クリスはワン子の勝負を受ける様子だった。

「……俺は遠慮する。昨日で疲れた」

勝負事が好きな春樹だったが、辞退するらしい。

「ハハハ、体力不足だな春樹。ワン子とクリは頑張れ。荷物は任せろ。バスのやつ乗り込めー！」

「フン！」

鼻を鳴らし、春樹はバスに乗り込んだ。

先に旅館に着いた風間ファミリー一向は、キャンプが寝ているため百代が代理で仕切っていた。

「夕飯までには時間があまっている。とりあえず、好きに行動しろ」

ガクトとまゆっちは外へ、キャンプと京は部屋に、モロと百代はゲームをと本当に好きな行動をしていた。

「さて俺はどうするか」

「春樹一緒にワン子とクリスが到着するのを待たないか？」

「直江か、いいだろう。では行こう」

「さっきは言わなかったけどその絆創膏どうしたの？あとなんか疲れていたみたいだけ」

「いや…なにもない…ゴニョゴニョ…」

最後の方に「超回復とか…」と言っていたが大和には聞こえず、とりあえず春樹は誰にも言う気はないらしい。

「気になるけど、まあいいか。それにしても遅いな」

あれから数時間もたっているが、ワン子とクリスの姿がまだ見えない。

「ちょっと待て……」

春樹はそう言つと目を閉じた。

「ん。もうすぐだ」

目をあけ前方を指差す。5分後そこから全速力で走ってくる二人の姿が見えた。

「そらああラストスパートオオオツ!!!!」

ワン子が吠え

「絶対に負けん!!!!」

それに対しクリスも意気込む。

「旅館前だぞ、止まれって……おいおいおい!!」

大和の存在など気にせず二人は速度を落とさない。

「仕方ない」

「へ?」

ぶつかる直前に春樹は大和の首元を掴み後方に跳んでいた。

「すまん、助かった」

「気にするな。それより決着はどうなった」

「どうやら同着みたいだ」

ワン子とクリスの会話が聞こえた大和はそう答えた。

「そうか、とりあえず風呂にでも行かせた方がいいだろう」

言われてみれば二人の体にはあちこちに葉っぱや木の枝などが付着していた。

「……………」

「春樹どうした？」

「いや、何でもない。少しその辺を散歩してくる。夕飯までには戻るはずだ」

そう伝えると、どこかに消えていった。

大和には見えなかったが、春樹の眼はギラギラと口角はつり上がっていた。

箱根旅行初日 後篇（前書き）

熱が出てお留守番の薫、です

箱根旅行初日 後篇

山の中を白髪青年が駆け回っていた。顔や服の所々は無数の返り血がついており、少し土などで汚れていた。

「フハハハハハ……」

小さく品のない笑い声が静かな山中に響く。

「旅行を邪魔するヤツは許さん」

アノ時、春樹は旅館から3キロ程離れた所に陣取っている複数の気配を感じた。その気配の持ち主達からは殺気が出ており、百代の超加速を真似^{コピー}して、距離を詰めた。

気配のした場所には5人の男が居た。向こうは春樹に気付くとソノ漏れ出る殺気を春樹にぶつけてきた。

「俺に対して……」

それだけ言うと春樹は一番近い男に擬似超加速で詰め寄り喉元に向け抜き手を放った。

それは力と体力のない春樹は短時間で相手を倒せるように考えた攻撃だった。

効率よく倒すなら奇襲を仕掛ければいいのだが、それは春樹の性格上許せない行為らしい。

「ぐ……………」

目にも止まらぬ速さで動いた春樹の攻撃をかわさず、受け流せずに直撃した男は声にならない声をあげその場に倒れた。

その光景を見ていた男たちは仲間と思われる男の心配などせずに、春樹を見据えどこから出したかはわからないが各自武器を持った。左から刀、メリケン、槍が二人。

対峙している春樹と男4人。

「……………斬ッ！」

先に動いたのは刀を持つ男だった。

春樹の肩を狙い斬りかかった。正確で速度も申し分ない。

常人ならその柄から先は見えない。だが相手は春樹、目の良さはピカイチで一流の格闘家を遥かに凌駕する動体視力の持ち主。

肩に迫る刀身を完全に見切り最小限の動きで避け、刀身の横っ面をブン殴った。

ビキッ！

鈍い音をたてたのは男の持つ刀だった。

自分の持つ刀にひびが入ったことに気付いた男は刀を捨てバックステップをとり距離を取ったが、それよりも速く男に肉薄した春樹。その手には折れかかっている刀、男の腹部に全力で峰打ちを繰り返す。

した。男の体はくの字になり倒れ、刀は「バキ！」と音を立てて折れた。

「この程度のなまくらを使う貴様の技量もしれている」

不敵に笑った春樹の眼は薄暗い中でも金色に光っている。

「次は…！？」

春樹は背後から迫る気配を感じ振り返り両腕をクロスさせた。

ミシ…！！

ガードしている腕の上からぶつけられたのはメリケンをはめる男の拳だった。

「貴様…！！！！！」

春樹は背後から攻撃した男に殺気をぶつけた。

「……………」

飲み込まれるような錯覚を思わせる殺気を当てられたメリケンをした男は一步下がりその後動かなくなっていた。

春樹は男に一步。また一步と近づき

「背後から来るような屑は消え失せろ」

そう言い動けず無防備な男の顔に拳を放つ。恐怖一色に染められ

ていたメリケン男の顔には残酷なまでの一撃が直撃した。

「ぐひっ……！」

鼻が折れ、口の中がズタズタになったメリケン男からは血が吹き出し、そのまま後方に吹っ飛んだ。

春樹は男の血がかかった事を気にも留めず、残りの二人の方を見た。

「次は貴様達だ」

槍を持った男二人にはもう戦う意思は残っていなかった。

二人は見てしまったのだ。狂気に染まった春樹の顔を……

「お、俺たちはもうやる気もない。見逃してくれ」

「そうそう……その通りだ。武器も捨てる」

大柄な男と小柄な男は槍を地面に置いた。

「ほらこの通り。これでいいだろ？あんたにはもう敵意なんてない」

早口でそう言う大柄な男。

武器と二人の男を交互に見た春樹はニヤリと笑った。

「そうだな」

「じゃあ見逃してもらえ「せめて痛くないようにしてやる」ひっ……」

小さく悲鳴をあげた大柄な男はその場に倒れた。

一番近いところから見ていた小柄な男には何が起こったかわからなかった。

気付けば相方である男が倒れていたのである。

ただわかったことは、——ヤバイ！ということ。

次に自分がやられるとわかった男は180度ターンして全力で走り去った。

「敵前逃亡か……逃げさん」

このようなことがあり冒頭のシーンに繋がるのだ。

「逃げれると思うなよ」

手に先程捨てられた槍を二本持たれていた。

一本を逃げる男の足元を狙って投擲する。投擲された槍は男の右足を掠り、動きを一時的に止めた。

「ひっ！た、頼むよ！許してくれ」

背後から迫る恐怖に耐えきれず叫びながら命乞いをした。

「俺に殺気をぶつけたこと、潔く戦わなかったこと……許されると思っな」

.....。

「はぁ…疲れた」

先程までの狂気はどこかに消え、春樹の顔はどんよりと疲れ切った表情になっていた。

「腹減った…夕飯までに間に合うかわからんが、急ぐか」

擬似超加速で旅館を目指して駆けていった。

なんとか夕飯までに旅館に戻った春樹は超加速でも応用している

かのような早さで出された料理を食べきった。

箱根旅行初日 後篇（後書き）

感想などもらえると思います

箱根旅行二日目 前篇（前書き）

やる事がなく連投

箱根旅行二日目 前篇

旅行二日目はファミリー全員で行動することになっていた。

「釣りの手続きはしておいた。竿も借りたぞ」

準備のいい大和は釣り道具をレンタルしてきた。

旅館から少し歩いた場所に景色のいいところを見つけ、そこを拠点にした。

「よし盛大に釣ってやろうぜ！ ひゃっほう！」

キャップはテンションが上がっているのか気合が入った声を出しながら、釣竿を持って川に駆け出した。

岩の下から虫を捕まえ、針にさしたキャップはさっそく釣りを開始した。

「俺もしてみるか」

「じゃあ春樹！どっちが大量に釣れるか勝負しようぜ！」

「面白い。やったことはないが「ヒットー！」なに！？」

キャップの釣竿にはヤマメがぶら下がっていた。

「アタシは釣りの前に修行しよっと！」

旅行中でも修行を怠らないのはワン子らしい。

「ま、時間はたんまりあるしいいだろ。京も一緒に稽古つけてやる。春樹もどうだ？」

百代は春樹に声をかけたが返事がこない。

「……………」

無言で竿を見つめる春樹の姿があった。それもすこぶる機嫌が悪そうだ。

キャップのバケツの中には早くも4匹も入っている。対して春樹のバケツの中には水だけしか入っていない。

「まあ春樹は釣りを頑張れ。あと弟、私の分も釣れ。三匹以上釣っていないと私刑な」

「厳しい法律だな……………」

川神姉妹は京を連れてこの場を離れて行った。

「……………何故だ…何故釣れん……………」

一向に釣れる気配のない春樹。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…。と効果音が聞こえてきそうなオーラを出

している。

「そんな風だと釣れるものも釣れないよ」

モロは勇気を出して春樹に話しかけた。

「師岡か…」

話しかけてきた相手の方に振り返ると低い声で返事をした。

「ほらキャップみたいに楽しまなきゃ」

「よっしゃー！5匹目ヒットー！！」

モロが指差した方向にいるキャップはまた魚を釣っていた。

「……………」

おもむろに釣竿を置いて春樹はどこかに歩いて行った。

「おーいどこ行くの？」

「キャップに勝てないって諦めたんじゃないの」

ガクトは春樹の背中を見ながら言った。

「釣りのセンス皆無そうだったからねー」

そう言いながらモロが見たバケツの中には未だに水だけしか入っていない。

春樹の眺める方向にはワン子と京が組み手をしていた。

——あれほどまで努力して鍛錬をするか…。

眺めていた組み手が中止される。

ワン子と京が見た先には一人の外国人が立っていた。

——さっき感じた気はあの軍人か？面白い……。

何度か会話をかわしたワン子と京の二人は軍人と戦闘に入った。

ワン子は次々と攻撃を繰り返していくが、相手には届かず全て受け流される。

「なかなかの動き、褒めてあげてもいいでしょう」

「まだまだあ！」

速度を増した攻撃も全く通じていないのか、守りに徹していた軍人は反撃を開始した。

軍人は稲妻の如き蹴りを放ち、そこから蹴りの連撃に繋がった。

「っ…重いっ。ガードの上から削られる！」

なんとか軍人のラッシュを防ぎきったワン子は間合いを取るためバックステップをする。入れ替わるように京が軍人に向かって行った。

「シャッ！」

京の空気を切り裂くような鋭い手刀が、軍人の首元へ飛んでいく。だが直撃することはなく紙一重で軍人は避けた。

「さあ反撃されなさい！」

先程と同じように蹴りのラッシュで京に迫る軍人。京は上手く捌ききれずにじりじりと後退していった。

徐に軍人は軽く飛び上がり、モーションの大きい蹴りを振り下ろした。

「さすがに食らわない」

京は飛ぶ僅かな隙に後方へ回避した。軍人の蹴りは京に当たることなく地面に落ちた。その威力は絶大で落ちた場所は破壊されていた。

——やはり強いな…。だがこの状態だと川神達でも十分だろう。

「京、これ稽古と言わず真剣で行くわよ」

「ん。本気出す」

軍人に接近したワン子は体勢を低くし軍人の足元を刈り取るかのような一撃を放った。

「蛇屠り！」

跳んで回避した軍人はしゃがんだ状態で硬直しているワン子目掛け、空中からとび蹴りを繰り出そうとしていた。

「鳥落とし！」

ワン子は接近してくる軍人目掛け狙いすましたかのようなサマーソルトキックを放った。

しゃがんだ体勢から攻撃が来るとは思っていなかった軍人は迫り来る蹴りを避けることもできず直撃することを余儀なくされた。

「次は私！」

ワン子の蹴りが直撃し体勢を崩しながら着地する軍人の隙を逃さず襲いかかる京。

「チィ！」

軍人は迫りくる京の顔目掛け突きを放った。

だが京はその突きを放つ腕を下から突き上げ、上へと突きだされた軍人の腕を掴み素早く懷に潜り込みそのまま投げた。

「せやつ！」

豪快な音を出しながら地面に叩きつけられた軍人。

——終わったな。……ん？

とどめをさしたと思い互いを褒め合うワン子と京だったが、軍人はむくりと立ち上がった。

——うたれ強い。いや…雰囲気が変わった。

「……H a s e n（野ウサギ達め）J a g d（狩ってやる）」

立ち上がった軍人に向かいワン子と京の二人は左右から蹴りを放った。

その攻撃を同時に受け止めた。

軍人の手にはいつの間にか武具が持たれていた。

——トンファーか。強さが上がったか…もう無理だ！

「H a s e n J a g d」

トンファーを回転させながら放った一撃がガードをしている京を吹っ飛ばした。

「京！」

「っ、大丈夫！」

ワン子は京を庇うように軍人に接近していくが、暴風のような攻

撃を前に回避するしかないようだ。

「この乱撃、隙がな…」「トンファーキック!」!？」

ガシ!

「え？」

ガラ空きの腹部への蹴りだったが、ワン子に届くことはなかった。

「春樹君!？」

軍人の蹴りを放った脚と交錯するように春樹の脚があった。

「人の獲物を取るのは気に入らないが…我慢できん!軍人…俺が相手をしよう」

そう言うやいなや目には追えない速度でトンファーを持つ手目掛けジャブのような攻撃を放った。

「…!!」

なんとか経験と勘で避けることができた軍人は距離を取った。

「ほう、あれを避けるか…面白い…面白いぞ!!」

明らかにテンションが上がった春樹は金色の眼で軍人を睨むように見た。

——この男、危険だ。

「軍人…名は？」

「人に聞く時は自分からが常識ですが、まあいいでしょう。私はマルギツテ・エーベルバッハ。誇り高きドイツ軍の少尉です。覚えなさい」

軍人はマルギツテと名乗りダラリと垂らしていた、トンファアーを構えた。

「覚えておこう。俺は春樹…もっと本気を出してもらおう」

春樹も構える。トンファアーこそ持っていないがその姿はマルギツテとそっくりだった。

「！?…いいでしょう。これならどうです！」

マルギツテは先ほどまでの倍とも言える速度でトンファアーを器用に振り回しながら春樹に迫った。

回転させたトンファアーで払うように攻撃をする。春樹はそれに合わせるかのように脚でトンファアーに蹴りを入れた。

トンファアーは標的を失い春樹の外側に弾かれた。その後春樹は弾いたトンファアーを持つ腕の方向に潜り込もうとした。

「させません！」

マルギツテは体を回転させその遠心力を利用した突きで接近する春樹に牽制攻撃した。

牽制と言えど威力は高く当たれば骨位なら簡単に粉碎されてしまう。

それを理解したのか春樹はピタツと前進を止め、横っ跳びで迫りくるトンファアを回避した。

「まだ強くなれるだろう？その眼帯を外したらどうだ？」

「その必要はありません」

春樹の要求に応えないマルギツテ。

——この女…

「いいだろう。無理やりにも外させてやる」

そう言つと目を閉じ、2秒程で再び開いた。

——雰囲気が変わった？

マルギツテは春樹に何か変化が起きた事に気付いたが、それを恐れる必要もないと考え攻撃にうつてでた。

「京…あれ全部見える？」

春樹達の戦闘を見ているワン子が京に聞いた。

「一応見えるけど…あれを避けるのは無理」

「だよね…凄い…」

——何故当たらない！

常人では見切ることもできない嵐のようなトンファーによる攻撃を全て最小限の動きで避けていた。それもほとんどその場から動かずに。

「H a s e n J a g g d ! ! !」

マルギツテは今日の戦いの中で一番早く、鋭い突きを放った。

「……。神楽流——鏡……」

春樹は何かしようとしていたが途中でやめ、バックステップで避けた。

空を切るマルギツテのトンファー。

「なぜ途中やめたのですか？答えなさい」

春樹からはもう戦闘意思が感じられなくなっていた。無言のまま背を向け去って行った。

「待ちなさい「何してるんだお前」」

いきなり背後から声が聞こえたマルギツテは振り返った。

「私の後ろをとるとは」

「闘気うを感じて来てみれば面白い展開になっているとは…春樹はどっかに行っちゃしまったが」

振り向いた先には百代が居た。後ろには大和もいる。

百代はマルギツテを見据え「春樹の代わりに相手をしよう」と言
いだした。

「なんの騒ぎだ？……あ」

「クリスお嬢様」

「マルさん」

「おいおい、殺気をおさめるのか」

「え？クリの知り合いなの？」

その後登場した軍人であるクリスの父が事情を説明し、引き連れ
ていた軍人達を回収し、撤収していった。

「戦いたかったなー」

百代が愚痴る。

「あの人そんなに強いのか？」

「ああ…不完全燃焼だ。春樹とじゃれて（戦って）くる」

そう言って百代は春樹を追いかけて行った。

箱根旅行二日目 前篇（後書き）

これから先、春樹に漫画やアニメなどに出てくる技を使わせる予定なのですが

模倣してほしい技があればリクエストしてください。

作品名、キャラ名、技名、特徴を言ってくだされたらありがたいです
できる限り使わせます。

箱根旅行二日目 後篇（前書き）

熱が下がらない

箱根旅行二日目 後篇

思わぬ乱入者がいたが今は気を取り直して、風間ファミリー一行は釣りを再開していた。

「くそつ、百代め」

「どうした春樹？」

大和は春樹を見ながら聞いた。

「百代に襲われた…」

そう言う春樹の姿はボロボロで、服は所々破け、体には小傷が目立っている。

「ああそついえば姉さん、春樹とじゃれてくるとか言ってた気がする」

「同情するぜ。同情ついでに俺様の筋肉分けてやろうか？」

「いや、遠慮しておく…さて釣りを再開するか。魚共め…覚悟するがいい！」

春樹は新たに気合を入れなおし、竿を持って川と向き合った。

——20分経過。

「やつほうまたヒットだぜ。20センチ以上あるな」

キャップは次々に魚を釣り上げていた。それを悔しそうに見る春樹。

「……………」

「勝負は俺の勝ちだな！」

「……………」

「これ川下の釣り人に売りにいったら商売じゃね？」

「……………」

「よーし。行ってくるぜ！ 我ながら商売人だ！」

キャップはそう言うとき凄い速度で駆けていった。

「……………諦めん」

「止めるヒマがねえ」

「まあ私達は好きに動くさ……」

「釣りする気、ないねアナタは」

大和と百代は姉弟のスキンシップを取りだした。

「……………」

百代と遊び終わった大和、今日の目的であった「クリスと少し仲良くなる」を遂行するためにクリス達のもとに近寄っていった。

まゆつちのモノマネでさりげなく近寄った大和はクリスやまゆつちの隣で釣りをしだす。

——大和さんとクリスさん、これを機会にもっと仲良くなれますように。

——できれば私も仲良くなってくれますように。

まゆつちは大和とクリスを眺めながら優しい思いと健気な願いを心の中で呟いていた。

父親に会えたクリスは上機嫌に様子で鼻歌を歌いながら釣りをしていた。

大和はそんなクリスを見てチャンスだと思い話しだした。

はじめはクリスの父親を褒め、軍人も褒める。

単純なクリスは自分の尊敬する父親や軍人を褒められ、さらに上機嫌になっていく。

そんな大和とクリスの姿を見てまゆっちは感心していた。

「ところで軍人ってよ、作戦とか使うよな？」

「ああ。ブリッツクリークとかな」

大和は上機嫌なクリスに軍人の使う作戦と大和自身が使う作戦が根本的には一緒だと説明しだす。

「まあそういうわけでさ、俺は実践向きの男だと理解してもらった上である程度は仲良くしようじゃないか」

「……よくわからんな」

仲良くしようと言う大和の言葉を正面からぶった切るクリス。

「なんでだよ」

「……お前の言ったところで説得力がない」

クリスの説明はこの言葉から始まり

「いや言葉に重みがない」

「あるいは口だけと言い換えるべきか？」

などと次々と大和に対する思いが出てくる。

そんなことを言われた大和は黙っているわけにもいかなかった。

「こんにやろ……好き放題言ってくれろ」

クリスはその後、大和が仲間の事を思っている気持ちはわかるが体が拒否していると付け加えた。

互いの主張がすれ違いわからない大和とクリスは勝負を言わせた。言わせた。

そこにキャップが下流の方から食材を持って帰ってきた。

「丁度いいところに来た。今面白い事になってるぞ」

「何つよくわからんが俺のいない間にずるいぞう！」

……………。

事情を説明されたキャップは納得し百代と、決闘をする二人が平等になるよう勝負内容を決めると言った。

「わかりました」

「なら、まかせます」

…ピクン！バシャ！

「ようやく釣れたぞ！見るこの魚を！……ム、なんだこの空気は？」

「まだやってたんだ」

釣りに集中し今までのやりとりを聞いていなかった春樹がいた。

夕食も終わり、各自は好きな行動をとっていた。

「俺様出現。右良し左良し」

「安心しろ。周囲には人いないぞ」

ガクトの出現に大和が答える。

「…俺はいるがな…あと…」

夕飯後寝ていた春樹が大きなあくびをしながら大和とガクトと二人を見た。

「起きてたのか？まあいい。じゃあ早速、下の旅館の風呂覗きに行こうぜ。春樹も一緒に行くぞ！」

「何故俺達を誘う」

「キャップはお子様で女体に興味なし。モロはビビりまくりのチキンボーイ。だが俺達4人の中で一番エロいお前なら！！あと春樹はなんとなくだ」

「わかった、いくよ」

「同行しよう。聞き耳を立ててるやつもいるしな」

「ん？よくわからんけど…よく言った！導かれ者達よ」

ガクトはそう言って意気揚々とドアを開けた。

「くくく。キイタゾキタゾー」

百代が立っていた。

「大変だ。大和！春樹！いきなりラスボスだ！」

「だから言っただろう。聞き耳を立てているヤツがいると」

驚くガクトに春樹は知っていたと言い、さも当然のように百代を

見据えた。

「百代…邪魔するつもりか？」

「私も行くっ」

春樹、ガクト、大和の三人は自分の耳を疑った。

「私もねーちゃん達の裸を見る」

当たり前だろうといった様子で答える。

「で、どっちだ？どこで覗ける？」

「ラスボス二人も味方についたぜ！頼もしい！こっちだ」

新たに百代を加えたガクト達は山の中へと入っていった。

「それにしても以外だな」

百代はそう言い春樹をじろじろと見る。

「何がだ。あとその視線やめろ。不愉快だ」

「いやー春樹も女の裸に興味があるとは。このムッツリめ」

「……………」

百代の言葉を見殺し前を向き無言で歩いて行った。その背中には怒りが現われている。

「しゃいだなあ」

「あんまり春樹を刺激しない方がいいよ姉さん」

「ん？嫉妬か弟よ」

大和に抱きつく百代。

「ポイント到着。ターゲットはラクロス部女子学生」

先頭を歩いていたガクトが歩みを止める。

「ぷりぷりのピーチやメロンが並ぶ八百屋を堪能だ」

「さあ、この茂みをかき分けるとエルドラドが…」

「……少し待て……」

フシンシャハッケン ケイビタイセイレベル4！

春樹は止めようとしたが、それよりも速く突如機械の音が響いた。

「な、こんな装置昨日の昼間はなかったぞ！」

「ちい、夜の間の警報装置か。敵も考えるな」

ガクトがうつろたえ、大和が悔しがる。

「……来るぞ」

「む、早い。6人ほどの人間がこっちにくる」

「警備員の動きめっちゃ迅速だな」

「私達はいくらでも切り抜けられるが、お前と一緒にでは姿を見られかねん」

「…意識を失わせてくる」

春樹は擬似超加速でその場から消える。

「あの馬鹿ッ。私はあいつを止めに行く。お前達は…」

百代はガクトと大和をそれぞれ片手で持ちあげた。

「俺達は…?」

ガクトと大和の声が被った。これから自分達の身に降りかかるであろう事を予想し、その声はやや震えていた。

「お前達は下の川に逃げろ。無事戻ってこいよ」

手にもつ二人を投げ飛ばした。

「うおおおおおおお!」

「バ力なあああああ!」

「さて私はあの馬鹿を止めに行くか、と」

声を残し百代は暴走した春樹のもとへ文字通り飛んで行った。

「あれか」

6人いる警備員にありいな早さで接近する春樹。

「意識を一時て…うおっ!!」

春樹は突然後方からの衝撃を感じた。

元々早かったが、さらに加速し空気を切り裂く弾丸の如く警備員達の傍を通過していく。

「今、何か声聞こえなかったか？」

「気のせいだろ？それより覗き捕まえないと」

春樹は声を出していたにも関わらず、警備員達には気付かれていなかった。常人の目には何も写らない速度で通過したからだ。

翌日旅館近くの木に突き刺さった春樹が大和達に発見された。

発見されたあと大和とクリスの決闘が終わるまで気を失っていた。

バイト戦士（前書き）

旅行三日目ぶっ飛ばしました

バイト戦士

春樹を除く島津寮の寮生全員が居間でまゆっちの入れたお茶とゲンさんの持ってきてくれた和菓子を飲み食いしながらDVDを見ていた。内容はクリスが新しく買った勧善懲悪の時代劇。

一番の山場も過ぎ、今はもうエンディングテーマが流れエンドロールに入っている。

そこに春樹が帰ってきた。

「あつ、おかえりー」

「……………」

ボタン。

音をたてその場に倒れ込む物言わぬ春樹だったもの。

「どうしたの？」

「……………」

「おーい春樹い！」

「……………」

「失礼します…せいつー!!」

まゆっちが春樹の腹部に手をあて衝撃を与える。

「ぐふっ！…俺は、何を……」

目の焦点があつておらず、様子のおかしい春樹。

「それは俺たちが聞きたいよ、何があつた？」

「……………」

「今日はキャップさんに紹介されたバイトに行かれてたはずですが」

何も言わない春樹に代わりまゆっちがそう告げる。

「そついやそつだつたね」

「で、バイトに行った春樹は何でこんなに憔悴しきつてるんだ？」

大和達の前に居る春樹は顔色が悪く、綺麗な白髪も乱れていて、元気の欠片も感じられない。

「あ、あ……」

何かを話そうとしている春樹だが上手く声に出せず、空気だけが漏れ掠れた音が聞こえる。

「とりあえずこれでも飲め」

ゲンさんが憔悴いしきつている春樹の為に茶を入れ手渡した。

手渡されたお茶を振るえる手で受け取った春樹は、一気に口の中に流し込んだ。

「落ちついたか？」

「……ああ落ちついた。すまん」

「気にするな。別にお前の為に入れたわけじゃねえ」

ゲンさんはそう言うと、夜のバイトがあるのか外に出て行った。

「で、なにがあった？」

大和が皆を代表して聞く。

「ああ、それが——」

——太陽が一番高く昇る頃、一人の青年が小さな紙を片手に持ちながら歩いていた。

その姿は黙っていれば女性と勘違いされるほど整っていて、綺麗な白髪を揺らし見るもの全てを見透かすような金色の瞳をしている。

紙と道を見くらべキョロキョロしながら歩く姿を見て何人が

「どうしたの？」

などと言いながら強引にナンパしてきたことだろう。ナンパされた本人はその度、顔を怒りに染めながら蹴散らしていた。

目的地に着いたのか歩みを止め目の前にある建物の二階を見上げる青年。

歩き回って額に浮かんだ汗を拭いながら階段を上り、趣味の悪い絵が描かれたドアを不審に思いながら開ける。

ガチャ。と音をたて入った先は春樹がこれまで経験したことも、見たこともない世界が広がっていた。

お帰りなさいませご主人様

ドアを開けたままの格好でフリーズする。

——なんだここは！？メイドだと！接客業だと風間は言っていたが…

何も言わず動かない来店者を見て営業スマイルだったメイド達の顔も徐々に崩れていく。

「ちょっとごめんねえ、あら来たわね。早速こっちに来なさいな」

沈黙を破ったのはメイド達の奥から出てきたのは2mを超えるゴツイ男だった。

固まったままの春樹の腕を持ちズルズルと引っ張っていく。

「……はっ！…自分で歩ける。だから離せ」

自分を拘束する腕を払いのけ、重い足取りで目の前にいる男の後ろをついて行く春樹。

「風間ちゃんから容姿は聞いてたけど…これだったら大丈夫ね」

男は困惑した様子の春樹を見ながら独り言のように話し一度頷くとどこかに歩いていった。

——メイド喫茶だったか？あのおっさんはなんだ？ゴツイうえに女みたいな話し方…二度と会いたくない生物だ。

そんな春樹の思いは数秒後に打ち碎かれる。

「お待たせえ。これを着てちょうだい」

そう言いながら春樹の前に現われたものはフリルと大きなリボンが目立つ……

「……………メイド服だと、」

春樹がカタカタと肩を揺らしながら、手にあるメイド服を睨んでいると

「サイズは合うはずよ？それともミニの方がよかった？」

「サイズとかそういう問題じゃない！！俺は男だぞ！？」

自分の考えなど全く察していない男の言葉に怒りを露わにする春樹。

「ちよつとー二人程来てちようだい」

呼ばれて出てきたのは春樹の目の前にいる男と同じ位ゴツイ二人の男だった。

「ちよ、ちよつと待て、な、何を……あ、アーツツツ！！！！………」

「お、お帰りなさいませ……ご主人様」

春樹が入店した時にはいなかった、白髪のメイドがいた。

もともと女性と間違われる程の容姿をしていた春樹だったが、男とわかる部分はなく完全な女性になっている。

あの後現われた二人の男に押さえつけられた春樹は思いがけない力で抑えつけられ、抵抗空しく……あとはご想像にお任せします。

着替えたあとはこうして新人メイド、ハルとして働かされていた。

「お疲れ様あ。明日もよろしくねえ」

——というわけだ。風間に紹介してもらった手前、反故にもできん……」

春樹は今日の寮を出てきてからの行動を簡単に説明した。

それを聞いた寮生は同情の視線を送っていた。

「というか風間はどこへ行った」

部屋を見渡してみるが、先程まで居間で一緒にDVDを見ていたキャップの姿は消えていた。

「そっいえば春樹さんが話している間に部屋から出て行きましたよ

「？」

「…逃げたね」

見ていた文庫本を閉じながら京が呟く。

「文句の一つでも言おうとしていたんだが……次に会った時覚えておけ」

「……しょーもない」

春樹は疲れ切った様子で居間から出て行き、自室に戻っていった。

——深夜・春樹の部屋

「く、来るな！！近寄るな………うっ……」
うなされていた。

二人の戦い（前書き）

いやー……二カ月振りの更新でございますよ。
リアルが忙しすぎる……

二人の戦い

「ッ……！？」

後方にジャンプすることで暴風雨をまき散らし嵐の如く猛威を振るう一撃を避け、着地と同時にさらに横っ飛びする。

直後、耳を劈くような大きな音が辺り一帯に響き渡った。

「相変わらず凄まじい力だな」

余裕たつぷりといった口ぶりだが、額には汗が浮かび、その心境は穏やかではなかった。

「逃げてばかりでは面白くないだろう？」

こちらはまだまだ余力を残している様子で口元には笑みが貼りついている。

そんな対照的な状態でいる両者の周囲には隕石が落ちたと言われても信じるほどのクレーターがいくつも出来上がっており、そのほとんどが黒髪の少女、川神百代の手で作られたものだった。

もしも大地に大きな穴を穿つほどの一撃を身に受けてしまったら卒倒することはないだろう。文字通りただでは済まない。

「その程度の攻撃で俺を仕留められると思うなよ」

「そう言いながら結構きつそうに見えるぞ？」

「黙っている」

図星をつかれ鬱陶しそうに言い放った後、大きく息を吸い体に酸素を供給し空気を吐く。それだけのことでもいくらか落ち着くことができた。

心肺機能が元の状態に近づいたのを確認し意識を手集中させ始める。すると少年の体から黄色い光のような粒子が放出され始め、やがてそれは一本の刀となった。

「行くぞ」

力強く地面を蹴り呟くような声をその場に置き去りにした春樹は瞬く間に百代に接近した。

「そうだ！ それでいい！」

百代は獣のような笑みを浮かべ手を伸ばせば簡単に触れることができるほど近距離にいる春樹を見た。

弾丸の如く飛び出した春樹は勢いをそのままに回転すると片手で刀を一字に薙ぐ。大気を切り裂きながら襲いかかった刃は空を切った。

「ちい！」

舌打ちをした春樹は背筋が凍りつくほどの感覚に襲われた。咄嗟に刀を捨て（消滅させ）両腕を前に出し構えるとガードを固める。

春樹の一太刀を、身を屈めることで回避した百代は地を這うようにして接近していたのだ。

百代は下方から突き上げる軌道で拳を放った。

「ぐう……!!」

何とか耐えきった春樹だったがあまりの威力に体が浮いてしまった。

「川神流——」

「神楽流——」

「星砕き!!!!」

「鏡影!!!!」

百代の手から気のレーザーが撃ちだされ春樹の身に迫る。

が、同じく春樹の手から放たれた気のレーザーが百代の星砕きを相殺し両者の気は四散した。

百代との試合で初めは気を使った技をモロにくらってしまい意識が飛んでしまった春樹だったが戦いを重ねるうちに気の扱いをかなりものにしていたのだ。

「それまで!!」

「ちっ！ いいところだったのに」

「はあはあ……それは俺のセリフだ」

不完全燃焼な様子の百代と、息が上がりかかっている春樹。

「……まあいい。俺はこれで帰らせてもらっぞ」

「そういえば今日は何か用事があるって言ってたな。いったい何があるんだ？」

春樹は百代の声に顔を少し歪めながら

「バイト……」

と答え憂鬱そうに川神院を後にした。

「私はこの欲求不満を大和で解消してこよう」

対象的に百代は口笛を吹きながら川神院を出ていった。

「嵐が去っていきよったわい」

「本当にあの二人の戦いは凄いですネ」

戦いを見届けていた鉄心とルーの両者は、春樹たちが消えて行った門を見ながら話していた。

二人の戦い（後書き）

かなり短かったですかどうかお許しを……orz（土下座）

神楽流 - 鏡影^{きょうえい}

ぶっちゃけると『見様見真似。。。』ですw

主人公紹介（前書き）

以前書いていたものを削除したため新たに載せます

主人公紹介

名前：神楽 春樹【かぐら 春樹】

性別：男

身長：170？

体重：55？

髪形（色）：肩にかかる位の長さ。綺麗な白髪。

顔：女顔で美形

趣味：散歩・昼寝

好きなモノ：戦闘

嫌いなモノ：我慢、面倒なこと

武器：主に拳

戦闘などの才能はピカイチなのだが鍛錬を怠っていたため本来の力を発揮できないことが多い。
体力不足で長時間の戦闘や運動は苦手で嫌う。

百代と出会うまでは気の使い方をあまり知らず無意識のうちに使っていたが、何度か経験を積むことで自在に操ることができるようになった。

気量に関しては百代より僅かに多いが肉体のスペックを比べると百代に劣る。

神楽流・鏡影【きょうえい】

相手の動きを真似^{コピー}することができ、場合によってはオリジナルを超えることもある。

相手の技の名前をそのまま言うこともあるが基本的にはこれで統一している。

簡単に説明すると……『見様見真似○○○』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5179o/>

真剣で私に恋しなさい！！～白髪の放浪者～

2011年6月21日11時59分発行